

アーヴィン・ラズロの思想との比較に見た、今泉定助の人と思想

———現代科学からみた神道の可能性について———

(令和元年 一部加筆・修正しました)

齋 藤 竹 彦 (021-829698-0)

放送大学大学院 文化科学研究科

文化情報プログラム

研究指導責任者 佐藤 康邦 教授

2011年12月

# 修士論文要旨

学生氏名 齋藤竹彦

所属プログラム 文化情報

学生番号 021-829698-0

アーヴィン・ラズロの思想との比較に見た、今泉定助の人と思想

———現代科学からみた神道の可能性について———

## 要旨

我が国の精神的現状は、戦後の米国の甚大な影響や、グローバル化の拡大によって深刻な自己喪失が進んでいる。この自己喪失から脱却するには、我々日本人は自らのアイデンティティの基盤をしっかりと打ち立てる必要がある。日本の民族精神の基盤は神道であり、神道思想の代表として、今回は今泉定助の神道思想に民族精神の真髄を探求することとする。

今泉の思想は、古事記等の古典と禊等の修行による思想である。その今泉が見出した我が国の思想は、あらゆるものが根源的な神(天之御中主神)の霊(み)から、親子関係のように産み生まれる関係にあり、すべてが同根一体に繋がった関係にあるという「生成の思想」である。その世界観は、森羅万象を神の身分けの存在として、平等性と精神性を認める。これは西洋キリスト教など、万物は絶対神が自身とは別個に造った「個別的・差別的」な存在であるという「存在の思想」の世界観と大きく異なる。今泉は、従来は存在の思想が支配的であったが、これからは生成の思想の時代だとする。

この今泉の世界観を、アーヴィン・ラズロの紹介に従って、現代の科学によって検

証すればどうなるのか。まず相対性理論以降の宇宙観を根本的に覆す、現代の量子力学が見出した「量子真空」の宇宙観は、今泉の宇宙観とかなり重なり合う。さらに現代の進化研究、生体研究、トランスパーソナル心理学等が見出した世界観は、全てのものが繋がり合う存在であるという非常に驚くべきものであるが、この点でも今泉の思想と重なり合うのである。

一方で今泉の思想は日本文明を最上位に置き、他の世界の文明の違いを尊重しないという問題がある。我々は神道のいう修理固成の論理からも、八大文明の成立を多様性の成立として認めるべきであり、各文明の相違の尊重とともに、我々全てが同質性を持つ存在であるという意義を深く捉えるべきである。その時に初めて人類はその違いを尊重しつつ共進化する存在となるのであり、我々の今後の哲学は、常に単一の価値を追うだけでなく両面の価値を捉えた思想を持つことが重要である。

上記のことを前提に考えられる神道の可能性とは、万物は基底において対等であり、この世界は生命的世界であるという、基本的な神道の世界観(哲学)は、科学的世界観とも合致しており、人類の対立を超克する可能性があるという点である。その萌芽はすでに現れており、我々の古代思想が、最先端分野で世界に調和をもたらさう可能性があることを我々自身が気づくことが今求められている。

# 目次

---

第1章	はじめに	1
第2章	今泉定助の経歴	4
第3章	今泉定助の思想について	10
1.	「古事記」を原点に据えた思想	10
2.	「古事記」が垂示する「生成の思想」	12
3.	世界は何で満たされ、何が結びつけているのか。	15
4.	「生成の原理」思想から導かれる哲学とは	18
5.	存在思想の限界と生成思想の意義	21
6.	今泉定助の天皇観	22
7.	以上のまとめ	25
第4章	今泉定助の思想はなぜ普及したのか	26
第5章	宗教に対する科学的検証の可能性	30
第6章	比較対象としてのアーヴィン・ラズロの思想	31
第7章	今泉自身による科学的説明Ⅰ 物理現象について	33
1.	エネルギーという同根一体	33
2.	時間・空間について	35
3.	中今の思想と量子力学的時間	38
4.	「中心分派の空間」と量子力学	40
5.	物質の波動と粒子的性格について	42
6.	「エーテル空間」と量子真空の視点	45
第8章	今泉の科学的説明Ⅱ：精神・生命について	48
1.	フラクタル構造としての二霊三魂の法則	48
2.	量的世界に属する生命の在り方	49

3. 精神と物質の同根一体性	51
4. 万物生命論と万物精神論	53
第9章 宇宙観・生物観から一貫性をもった国家・社会関係の認識へ	56
1. 今泉とラズロの異なる点	56
2. 国家社会とは : 三魂発展の第四段階説	59
3. 日本と外国との違い	62
第10章 今泉思想の問題:副生界の扱い方について	64
1. 副生界の多様性の価値について	64
2. 日本思想が追い込まれた時代に生きた今泉	68
第11章 今泉の思想の批判的継承について	70
1. 神道思想から生まれる共生哲学	70
2. エネルギー界に基づく思想と副生界に基づく思想	71
3. 「世界皇化」は「神道」の「古道(自然道)」化で可能となる	75
第12章 最後に	77
■補足 現状の東北歴史博物館の歴史観と、今泉定助の特別展を開く意義	79
■参考資料	81
■神明社拝殿奉掲額	82

# アーヴィン・ラズロの思想との比較に見た、今泉定助の人と思想

## ——現代科学からみた神道の可能性について——

斎藤 竹彦

文化情報プログラム・学生番号021-829698-0

### 第1章 はじめに

21世紀の今日、我々の時代はグローバリゼーションの進展によって、この世界は非常に国境の垣根が低い時代になってきている。だが、必ずしもそれで世界が平和になったわけでも、人間の生活に幸福度が増したというわけではない。世界の現実は、多文化主義を導入したヨーロッパにおいて、それまで培われた自分たちの落ち着いた環境が失われ、他文化の美名の下に自分たち固有の文化や社会秩序を見失った喪失感に広く覆われる事態となっていると聞く<sup>\*1</sup>。

同様のことが今後我が国においてさらに進めば、全く同様のことが起こるであろう。グローバル化が始まる今から40年ほど昔、すでに1970年代において、戦後日本が米国の影響を強く受けて自らを見失った国になるであろうことは、鋭敏な感受性を持っていた三島由紀夫によっても予言されていた<sup>\*2</sup>。この予

---

\*1 一例ドイツ：<http://www.bbc.co.uk/news/world-europe-11559451> : 17 October 2010 Last updated at 07:51 The German Chancellor, Angela Merkel: "Immigrants should learn to speak German". Attempts to build a multicultural society in Germany have "utterly failed", Chancellor Angela Merkel says. She said the so-called "multikulti" concept - where people would "live side-by-side" happily - did not work, and immigrants needed to do more to integrate - including learning German. The comments come amid rising anti-immigration feeling in Germany. A recent survey suggested more than 30% of people believed the country was "overrun by foreigners".

\*2 [私はこれからの日本に大して希望をつなぐことができない。このまま行ったら「日本」はなくなってしまうのではないかという感を日ましに深くする。日本はなくなって、その代わりに、無機的な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜目がない、或る経済的大国が極東の一角に残るのであろう。それでもいいと思っている人たちと、私は口をきく気にもなれなくなっているのである。]【私の中の25年】三島由紀夫 「果たし得ていない約束 恐るべき戦後民主主義」(昭和四十五年七月七日付産経新聞夕刊)掲載より抜粋

言ははからずもほとんど当たってしまっていると言わざるを得ない（現実にはもっと自己喪失が進んだ国となっているが）。

そのような時代にあつて、我々日本人は何によって自己喪失から回復することができるのだろうか。このような意識が今回の探求の出発点であった。

通常、我々が自己のアイデンティティを築く場合に、その根本的な土台となっているものは宗教だと言われる。アイデンティティとは自己像であるが、同時にこの世界をどのように見るかという世界観もその中には含まれる。世界観の形成の根底においても、宗教は深く関わっている。従つて、今回の探求の方向は、日本人にとって自己の基盤となる宗教が示す世界観がどうなっているのかという探求であり、端的には我が国の民族宗教と言える神道の世界観を知ることであつた。何故神道かといへば、その後日本に入ってきた仏教等の宗教も、日本的な変質変容を遂げており、その変容する原動力となったものも、我が国の原点から存在する神道的な世界観によって包摂される形で影響を受けたからだと思うからである。すなわち、日本らしさを探れば、その行き着く先は神道であり、神道の世界観の喪失こそが我が国の今日の自己喪失につながっているのではないかと考えられるからである。

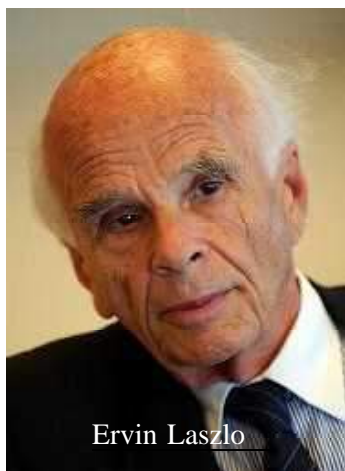
この神道の世界観とはどのようなものか。教義宗教では無いがゆえに、分かっているようではっきりしない神道の世界観を探求するには、よりその原点に近いもの、原型に近づく必要がある。では、神道の原点とは何か、それは今ある限りでは「古事記」であろうし、古代から伝えられてきたと思われる祭祀などの具体的な行事であろう。ただし、神官でもない自分が直接体験することは難しく、あくまで可能な形でのアプローチとなる。

この点から言えば、より「古事記」等の古典に通暁し、かつ行事等に関わつてきた人物で、しかも歴史上実際に広く影響を与えたと思われる思想家の思想の示すところを探求することが、まずは可能にして妥当な研究対象だということができる。



この視点で選んだ思想家が、今回のテーマである今泉定助(いまいずみさだすけ 1863 - 1944 年)であった。今泉定助は戦前では最も権威のあった神宮奉斎会会長に 1921 年(大正 10 年)に 58 才で就き 81 歳で亡くなる直前期まで歴代最長、日本最高の神社の奉斎を務めた。昭和においては戦前戦中とも歴代首相がその教えを受けるなど社会的影響力も大きく、神道界最大かつ最高の思想家であった。東京帝国大学以来の国学系の縦横無尽の学識と、禊行などの神道行事も本格的に探求し、体験的に学んだ神道の意義も語る事ができた、ただの学者ではない本物の神道人でもあった。今日神社界に禊行が入るようになったのも、「神社非宗教論」を克服した今泉の功績である。

以下はこの今泉の視点を探求し、日本神道の世界観の特徴を明らかにしようとするものである。まず今泉の人物像から始まり、その古典にもとづく世界観、そして特に今泉自らが言及した科学的にも神道は正しいことを語っているいうことを、現代の科学によって確認してみたい。その点では、文系の自分にも可能な探求としてシステム哲学の確立者の一人アーヴィン・ラズロ( Ervin László 1932 - )<sup>\*3</sup>が一連の著作によっ



て紹介をしている、現代科学の状況が大いに参考になることがわかった。そこでラズロの紹介する現代科学の状況とそこから導かれたラズロ自身の思想から、今泉の思想を検討することとする。

結論から言えば、そこで見えてきたのは現代の最先端の科学が捉えた世界観と、今泉が示す神道の世界観は非常に重なることが多いという点である。つまり、神道の示す

---

\*3 写真 <http://www.xzonedirectory.com/drervinlaszlo.htm>



世界観は、今後の科学の発展によってよりはっきりと真理を映したのものとして捉えられる時代が来るかも知れない。この小論は、拙いながらそうした神道思想の可能性を明らかにしようとした試みである。

## 第2章 今泉定助の経歴

今泉定助は文久3年(1863)、仙台藩家者片倉家臣今泉伝吉の第三子として、現在の宮城県白石市に生まれた。明治7年(1874)に白石神明社祠家佐藤広見の養子となり佐藤定介と名乗る。同12年(1879)、神道事務局生徒寮に入寮し、1年後国学者にして政治家であった丸山作樂<sup>\*4</sup>(1840 - 1899)の書生として深い薫陶を受け、15年(1882)、東京大学付属古典講習科に入学した。19年(1886)卒業後は、すぐに東京学士会院編纂委員として明治時代の百科事典『古事類苑』<sup>\*5</sup>編纂に従事する(1890年27才に辞す)。

23年(1890)、大日本帝国憲法公布の年には国学院創設に参画し、同校講師に就任した。なお、この年養子先の佐藤夫人与離縁した事により今泉定介と称し、41年(1908)、神宮奉斎会



\*4 写真 [http://202.209.73.88/users/jit/06jinbutu/02\\_kokusi\\_tai7.html](http://202.209.73.88/users/jit/06jinbutu/02_kokusi_tai7.html)

\*5 『古事類苑』とは、明治政府の一大プロジェクトとして明治12年(1879)に編纂がはじまり、明治29年(1896)から大正3年(1914)にかけて出版された、本文1,000巻、和装本で350冊、洋装本で51冊、総ページ数は67,000ページ以上、見出し数は40,354項目におよぶ大百科事典である。戦後においても2回復刻版が出版されるなど、今日においても日本史研究の基礎資料とされている。

宮城県本部長に就任。大正10年(1921)には神宮奉斎会会長に就任し、これ以降六期にわたって選出され、58才から終生同会会長の立場にあった。



川面 凡児

同10年末、相州片瀬にて川面凡児の禊を修め、祭政一致の国体論を提唱し、広く政治家・軍人・経済人等に国体を講ずる。大正13年(1924)清浦首相からの諮問、昭和6年(1931)台湾総督府の招待で渡台し各地で講演、同7年(1932)数え年70歳から戸籍上の定助に復した。8年(1933)陸軍参謀本部に於いて連続4日国体講義を行う。9年(1934)宇垣朝鮮総督の要請で渡鮮、朝鮮には10年(宇垣総督)11年(南総督)17年(小磯総督)と、各総督の要請で4度赴き毎回各地で講演を実施した。



日本皇政会 前列左から 今泉 葦津耕次郎 頭山満 昭和5年

10年(1935)満州国皇帝に対し、帝王祭祀を進講する。12年(1937)神宮奉斎会本院に於いて代議士六十余名に対し連続6日間国体講義、13年(1938)日本大学に皇道学院を設け院長として青年の教育にも努める。14年(1939)中国・蒙古・満州各地を視察しつつ各地で講演。17年(1942)1月に大東亜戦争に関するラジオ放送を4日間連続で行う。一方で2月には書籍発禁処分に遭う。9



朝鮮総督府にて 小磯総督と面談 昭和11年



満州にて 前列左から2人目今泉 昭和14年

\*6葦津珍彦氏によれば大正10年だが、6, 8, 10年のいずれかだったとされる。

月に白石神明社に頌徳碑建立(小磯大将碑文、米内大将篆額)。最期の揮毫「世界皇化」を遺し、昭和19年9月11日没、享年81歳。この間、内務省神社局参与(1939)国民精神総動員本部顧問(1940)神祇院参与(1941)大政翼賛会興亜総本部顧問(1943)などを歴任。設立に関わった団体に、国



ラジオ放送時の今泉

学院、東京都城北中学校、神宮奉斎会、敬神護国団、日本皇政会、皇道発揚会、日本大学皇道研究所、皇道学院、大阪皇道産業会、財団法人皇道社など。主著に、『皇道論叢』『大祓講義』『国体原理』等。(今泉の写真は以下もすべて『今泉定助先生研究全集一』より。以下『全集一』)

上記の今泉の人生の画期は、川面凡児(1862—1929)との出会いである。次の出版一覧からも分かるように、大正10年の川面凡児主催の禊行に参加した前後で、書かれた本のテーマが国学系から神道・國體系に大きく転換していることがわかる。

川面凡児主催の禊行参加以前 ( 国学系の著作である)		
古事類苑	神宮司庁	明29-大3
百家説林(畠山健共編、10巻)	吉川弘文館	明23-25
教育勅語衍義	普及舎	明24
御伽草子	吉川弘文館	〃
教育勅語例話(深井鑑一郎と共編)	〃	明25
伊勢物語講義	誠之堂	明26
竹取物語講義	〃	〃
土佐日記講義	〃	不詳
神皇正統記講義	〃	明29
女子国文	不詳	不詳
保元物語読本	明治書院	明30
平治物語読本	〃	〃
太平記読本	〃	〃
平家物語読本	〃	明32
平家物語講義	誠一之堂	明32-34
故実叢書	吉川弘文館	明32-39
平治物語講義	誠之堂	明34
大内裡凶考証	吉川弘文館	〃
国書刊行会叢書	国書刊行会	明38
古今要覧稿	〃	〃
新井白石全集	国書刊行会	〃
御大礼凶譜	博文館	大4
今井清彦翁小伝	国書刊行会	大9

↓ ここから、ほぼ完全に出版内容が神道思想系に転換している

大正10年 川面凡児主催の禊行参加以後(神道・國體系の著作である)		
精神作興	黙笑会	大13
精神の作興に関して	麴町教育会	〃
国体観念	教化団体連合会	大14
神社非宗教論	神宮奉斎会	大15
天皇の御本質に就て謹話	不詳	昭6
文献と行事	大倉精神文化研究所	不詳
皇道の原理	〃	不詳
神社建築に就て	社寺工務所	不詳
国体上より観たる政党政治の弊害に就て	不記	不詳
皇道講話	山州堂	昭9
国体の本義	参謀本部	〃
皇道の真髓	東方書院	〃
国体原理	立命館出版部	昭10
皇道精神を以て思想界を浄化せよ	皇道発揚会	〃
憲法原理	立命館出版部	昭12
国体の原理	清明会	〃
天皇機関説を排撃す	不記	不詳
国体精神と教育	三友社	昭12
国体明敏に就て	朝鮮総督府学務局	〃
神社祭式行事作法	不記	〃
周休講話	日本講演通信社	昭13
大祓講義	大倉精神文化研究所	〃
御国体の実相	大日本運動本部	〃
国体の根本精神	日本大学出版部	昭14
道義国家延設の経緯	皇道社	昭15
皇道の本義	桜門出版部	昭16
皇道論叢	〃	昭17
世界皇化の聖業	皇道社	昭17
団体講話	京城日報社	昭19
神道読本	不詳	不詳

(『全集一』p367-37より)

それまでの今泉は故郷白石時代から神道の世界に深い縁があり、東京帝国大学でも古典研究をなして『古事類苑』の編纂に4年間関わるなど、正統派国学者・神道家として地歩を固めていた。

今泉はこの古典に関する確かな知識を前提に縦横無尽な神道研究を行うことができる学者であり、実際に伊勢神宮奉斎会の会長職に就くなど、大正時代にはすでに



押しも押されもせぬ神道界の泰斗となっていた。

しかし、今泉は神道人として、明治以降の神社神道が「神社非宗教論」を根拠とした近代合理主義的な扱いをされていることに満足してはいなかった。この今泉の思いは決して今泉一人だけではなく、明治以降の熱心な神道家には共通した思いでもあった。そこから、多くの神道家が古神道の道に入っていったこともまた確かである。ただし、その場合には公的な神道界からの逸脱行為とも扱われ、現在よりも西洋を基軸において科学万能・西洋合理主義信奉の強かった時代において、それは正規の道としては扱われなかったのである。

今泉はそのような時代的風潮の中で自身も異端視されることをものともせず、自分の信念に従い真実を追う求道精神に従って、近代合理主義か



二見浦での禊行に参加した今泉(中央右側)

ら見れば際物扱いであった川面凡児の禊実践に参加し、体験的にその神道理解を激変させていった。そして江戸後期の復古神道理論成立以来、神社神道が理論的に深まることなく西洋の学問が権威を持つ中で二流の扱いを受けて影響力を失い、神社非宗教論的政策に従って広まった神道＝古俗的慣習レベルといった認識を、川面の神道論を咀嚼する形で大きく転換していったのである。この一連の今泉の行動は、すでに確立された地位にありながら、ここまで踏み込んだ神道人は他にはないと言っていいくらいの果敢なものであった。その意味では今泉は精神的に実に烈々とした熱い心を終生燃やし続けた人物であった。



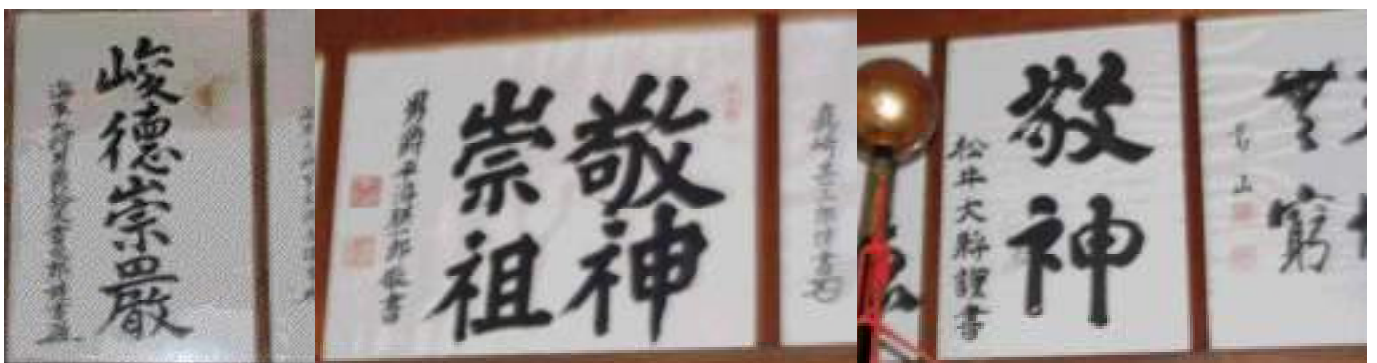
禊行中の今泉(右側から3人目)

しかし、これによって思想的大展開を遂げた今泉が打ち立てた、古神道的な神道理解は、その後の日本の國體破壊を旨とする共産主義の台頭や、世界経済のブロッ

ク化の中で、日本が生存の道を必死に見出そうとする危機の時代において、日本の國體論における基軸となっていく。そして歴代首相や大将クラスの人々が今泉に師事する、国師的な扱いを受けるレベルと



なっていくのである。ちなみに、今泉とその関係者が戦争という国家非常時においては、日本のあるべき姿は何かを闡明にして、一億一兆国民の心を団結に向けて励ます一方で、戦前戦中期の国家社会主義的政策の中にある全体主義などの非日本的な部分に対しては、日本の本来の國體から外れる政策として強い警鐘を鳴らし、時の権力から弾圧されるなどしたのである。このことは、従来の神道こそが戦争を招いたという、戦後GHQと仏教者及び近代主義者によって投げかけられた批判を覆す事実として、今日の我々は理解しておく必要がある。



白石神明社内に飾られた首相・大将達からの書(およそ47額) 松井石根大将、鈴木貫太郎大将、平沼騏一郎男爵 他 (齋藤撮影)

### 第3章 今泉定助の思想について

今泉の思想の出発点は、第一に日本の一連の古典であり、これを禊・祓そして鎮魂という行事・修養を経て読まねば、本当のその意義を理解出来ないという立場でこの読み方を示している。そしてその中でも最も尊い価値があるのは、「我が肇国以来

固有一貫の典範憲法<sup>\*7</sup>」を垂示した古典中の古典たる「古事記」である。

## 1. 「古事記」を原点に据えた思想

日本最古の書物「古事記」の記述内容についての評価は様々あるが、今泉はその半生をかけた国学的立場からも、また禊行を経て啓かれた神道の深奥理解からも、日本古来の最も深く確かな祖先の世界観・宇宙観が記されたものとしている。古事記とは、古代の語部が潔斎しながら禊や祓そして鎮魂を行い、神人合一した境地で与えられた祖先のからの垂示であり、我々もまたその潔斎し禊祓等を行う境地に立たないと、文字だけの分析解釈では垂示された内容は理解出来ない、そうした性質の古典であるとする。いずれにせよ、その扱いは嚴重であり莊嚴である。

この点について、今泉は本居宣長の次の一文を紹介しつつ、自身の古事記観を次のように述べている。

本居翁は（中略）更に「勅語」及「勅語旧辞」の解に於て次の如く述べられるのである。勅語は、天皇の大御口づから詔ひ属（つく）るなり。有司（つかさびと）をして伝へ宜（のら）しめ、又は書にかけるなどをも、たゞ勅とはいへども、そは勅語とはいはず。此にしもかく勅語のとあるを以て思へば、もと此勅語は、唯に此事を詔ひ属（つけ）しのみにはあらずて、彼天皇（天武）の大御口づから、此旧辞を諷誦（よみ）坐して、其を阿礼に聴取しめて、諷誦坐す大御言のまゝを、誦うつし習はしめ賜へるにもあるべし。<sup>\*8</sup>（若然らずば、此処には殊に勅語のこととわらべきにあらねばなり。されば余（ほか）の古書どもにも、勅語とはたゞ大御口づから詔ひつくるを云る例なれば、上には唯其意に注しおきつ

\*7 『今泉定助全集二』 p 22 以下『全集二』とする

\*8 是に天皇（すめらみこと）の詔（の）りたまいしく、「朕（わ）が聞けらく『諸家の費（も）てる帝紀及び本辭、既に正實に違（たが）い、多く虚偽を加ふ』と。今の時に當りて其の失（あやまり）を改めずば未だ幾年も經ずして其の旨滅びなんとす。斯れ乃ち邦家の經緯、王化の鴻基（こうき）なり。故（かれ）、惟（これ）帝紀を撰録し舊辭を討覈（とうかく）し、偽りを削り實（まこと）を定めて後の葉（よ）に流（つた）えんと欲（おも）う」とのりたまいき。時に舍人（とねり）有り。姓（うじ）は稗田（ひえだ）、名は阿禮（あれ）。年は是れ廿八（にじゅうはち）。人と爲り聰明にして、目に度（わた）れば口に誦（よ）み、耳に拂（ふる）れば心に勒（しる）す。即ち阿禮に勅語（みことり）して、帝皇（すめろき）の日繼（ひつぎ）及び先代の舊辭（くじ）を誦（よ）み習わしめたまいき。然れども運（とき）移り世（よ）異（かわ）りて未だ其の事を行いたまわざりき。『古事記』上巻より

るなり。)もし然るにては、此記は本彼淨御原官御宇天皇の、可畏くも大御親撰びたまひ定め賜ひ、誦たまひ唱へ賜へる古語にしあれば、世にたぐひもなく、いとも貴き御典にぞありける。

我が古典が古典として尊ばれるのは、単に古い書であるといふのみでなく、その垂示する真理が宇宙万有を貫流する生成化育の大道にして、歴史を一貫し無窮に躍動してゐるからである。古典が真理の大殿堂として尊ばれる所以は、真理の本源にまします天皇の「みことのりぶみ」として成立してゐるからであるが、就中古典中の最古の古典たる古事記は、天武天皇が「邦家之経緯、玉化之鴻基」として大御口づから宣らせ給ひ、元明天皇の御勅命によつて筆録せられた「みことのりぶみ」中の「みことのりぶみ」にして、古典の中に於ても最も尊重さるべき皇國の宝である(中略)。「みことのり」は、真善美の究極の帰一点にまします、天皇の大御心の表現である。「みことのりぶみ」中の「みことのりぶみ」たる古事記が、その開巻冒頭より、宇宙の絶対真理たる生成思想、産靈の原理を垂示するは決して偶然ではないのである。(『全集二』p22-23)

古事記こそは天武天皇自らが帝紀・旧辞が失われた状況で、稗田阿礼に大御口づから仰せになつて、誦み習わした勅語と言つても良いものに近いからである。またその内容たる垂示されたものが、「宇宙万有を貫流する生成化育の大道にして、歴史を一貫して無休に躍動しているから」<sup>\*9</sup>なのである。つまり世界の事実が書かれているということなのだが、この点でも今泉は古事記は人が禊・祓・鎮魂によつて神と一体になつて語つたものであり、人間の理解などに配慮せず、その変性意識状態になつている中で、直覚したことをそのままとめた内容なのだという。だからこそ、神々による真理が解き明かされているものだとするのである。

それでは、「古事記上巻」冒頭の一節「天地初めて発けし時、高天原に成れる神の名は、天之御中主神、次に高御産巢日神、次に神産巢日神。此の三柱の神は並独神と成り坐して、身を隠したまひき。」から何が分かるか。

## 2. 「古事記」が垂示する「生成の思想」

古事記の垂示する世界観とは、一言で言えば「この世界は、根源神・天之御中主

\*9 『全集二』 p 23



神から総てが誕生し、今もまた今後もあらゆるものが生み生まれる関係の中で展開し、成立していく」というものである。

「古事記上巻」冒頭の一節「天地初めて発けし時、高天原に成れる神の名は、天之御中主神、次に高御産巢日神、次に神産巢日神。此の三柱の神は並独神と成り坐して、身を隠したまひき。」から、根源神たる天之御中主神が成りませた時に、同時に天之御中主神の展開として世界(天地＝空間、時間、全物質・エネルギー等)が生まれ始まったのであり、その後に「成る・生まれる」ものも、総てが天之御中主神自身の展開に他ならないという。これは、天之御中主神を始源とし、その神の中で無生物・生物を問わず、親から子が誕生するように、世界は根本から末梢へそして中心から分派へという方向をもって総てが生み出されていくのだという、統一した「生成」を原理とする思想で全てが捉えられている。今泉はこの生成の原理を、親から子という縦の結び付きをもって「根本末梢同根一体」と呼び、また水平的な中核から周囲へ広がっていく結ぶ付きを「中心分派帰一一体」と云い、宇宙全体が「生み—生まれる」の関係にあることを「宇宙万有同根一体」と呼ぶ。

なお、古典各書の神名等の相違は下記の表のようになる。

書名	1代	2代	3代
古事記	天之御中主神	高御産巢日神	神産日神
日本書紀1書第2	可美葦芽彦舅尊		
1書第3	可美葦芽彦舅尊		
1書第4-2	天御中主尊	高皇産靈尊	神皇産靈尊
1書第6	天常立尊	可美葦芽彦舅尊	
古語拾遺	天御中主神	多賀美武須比 (高皇産靈神)	神産靈神
先代旧事本紀	天讓日天狹霧國禪月 國狹霧尊	天御中主尊・天常 立尊	可美葦芽彦舊尊
天書紀	國常立尊	天御中主尊	
上記	あめのみなかぬしのみこと	たかみむすびのみこと	かむみむすびのみこと
たかちほふみ	あめのみなかぬしのみこと	こもまくらたかぎのみこと	かむみたまみおやのみこと
宋史日本傳	天御中主		

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%80%A0%E5%8C%96%E4%B8%89%E7%A5%9E> より

今泉は、古典とは相互分担して書いてあり、ある書物にあることはこれを前提として改めて別の書物には書かないで論を進めていると言っていたが、この造化三神に関してはほぼ共通した名称になっており、日本共通の思想といってもよからうと思う。

では根源神・天之御中主神に対して、天之御中主神から生まれたこの二柱の神は、どういう役割があるのか。まず高御産巢日神は、武甕槌神と同じように「タケ」「タカ」のように「タ」音が入っているもの発願的なものを意味する故に、天之御中主神の発願・発展的な作用を担ったものとされ、それに対して神産日神はただ発展拡大するだけではない、中心に戻ってくる方向の還元作用を担われたものだとする。なお、「タ」に関してはこれは日本が言霊の国として、独自に発達した音韻論を元にした、神道世界ではごく普通の解釈だと言えるだろう。

この発願還元之二神が成す作用とは何かといえ、古典の言葉に従えば「修理固成(おさめつくりかためなせ)」である。世界は常に生成発展の過程にあり、この流れで一貫している。我々人間の在り方も、また社会・国家の在り方も此の流れにあることを自覚することから、適切な国家社会観の形成につながる。

ちなみに、キリスト教などに代表される、神が先にある世界は神の「造った」ものとして、神とは別個に存在するという世界観は、「古事記」の世界観とは、その出発点から世界成立の原理が異なっていることは注目に値する。この点を今泉は、まず神とは別個に造られた世界内にある一つ一つの存在も、それぞれが「別個に存在する一個」のものとして造られたから、それ自体が他のものではないという対立主義的な「存在の原理」を思想的特徴とするという。つまり、この存在思想においては、差別性と排他性が思想の中に内在しており、その本質として相互差別的・相互対立的な性格を有するのである。そして相互の違いが「存在」の基盤である以上、相互的な独立的個別性・相互不可侵性の要求が生まれ、これを協調ならしめるのは多元主義的か、圧倒的に同一性を強調する全体主義的な取り扱いのどちらかとなる。

従って、この思想を人間世界に当てはめれば、多元主義的な思想からは個人主義と自由主義が生まれ、全体主義的な思想からはまさしくファシズムと共産主義が生まれるのである。これらは、あくまで「存在原理」思想を本質とする外国の思想であって、日本の本来の「生成原理」思想から言えば、個人主義や自由主義だけでなく、ファシズムも共産主義もすべて日本本来の思想とは異質のものなのである。そして今泉は当時の日本の学者達が、これらの自分達日本の思想とは異質の原理で成立したものを、さも優れた思想であるかのように見なして、自国に導入することを進歩だと考える近代西洋中心の考え方は、自己喪失的であり、間違いなのだと主張している。この点は、今泉の強調されるべき思想的立場だといえるだろう。

### 3. 世界は何で満たされ、何が結びつけているのか。

ところで、我々の宇宙は何を以て天之御中主神と同質同体のもとなるのか。神道家としての今泉は、これを靈(み)と呼んでいる。靈という言葉では科学的な言葉とは言えず、にわかには信じがたいが、これは古代日本人が世界の成り立ちの根源を靈と言ったのであって、今泉が説明する靈の内容自体は、今日の科学的な把握された事実とも合致するものがあるように思われる。それを伺わせる説明が以下の部分である。これは、今日でいう「原子」または「素粒子」の世界と同じである。

凡そ宇宙にあるもの、動物でも植物でも鉱物でも、其の他日月星辰より雲煙氣流に至るまで、すべての物皆靈である魂であると解し、靈と魂とにあらざるものは宇宙に何物もないと祖神は垂示せられているのである。国には大国魂あり、劍には布都魂あり、食物には宇迦魂あり、此の他山にも、川にも草にも木にも、火にも水にも、皆靈魂ならざるものはない。靈は「ひ」とも「み」とも「ま」ともいふ。奇妙(くしび)の「ひ」、産靈(むすび)の「ひ」、天津日繼の日嗣は靈嗣の義で、是等の「ひ」という語は皆靈の義であり、又「み」といふのは山津見、海津見、などの見は靈(み)の義であつて、山の靈海の靈の意であり、荒魂(あらみたま)、和魂(にぎみたま)などといふときの「みたま」は、靈魂(みたま)である。又「ま」といふは形の上からいふのである。固より顕微鏡

にも機械にもかからぬ最小極微のものではあるが、我が国に於ては靈といふものは形は円形のものであると言ひ伝えたのである。

而して靈の渟（とどま）り溜まつたものを魂といふのである。「たましひ」いふ語も魂（たま）の靈（ひ）である。「し」は助辞「の」同じ意味である。靈は単一なるもの、靈の二つ以上千も万も集まつたものを魂といふのである。故に靈と魂とは、質に於いて変りはない。丁度元素の内容は原子であつて、原子の外表は元素であるといふが如きものである。（『全集二』 p 446）

以上のことから、いわゆる天之御中主神から派生した靈こそが総ての根源的な構成要素であり、その靈が集合して顕れたものを魂と呼んだことが分かる。両者は質的には同じものであり、一切の世界の構成要素はすべて共通したものであることを示しているのである。またさらに、魂があらゆる物質的な個体・形状を持つものになる原理については、靈が集まった魂の基本単位が「生魂」であり、生魂が具体的な形状をなす集合体として集まったものが「足魂」、そして足魂の真核となり統一主宰している魂が「玉溜魂」という説明をしているが、その詳しい解説は以下の通りである。これも原子・分子の構造とよく似ている。

猶分り易くいば、天之御中主神の御稜威が人生宇宙人類となり、万有となりつつあるのである。御稜威とは靈出の義で、靈は即ち天之御中主神の御靈である。其の御靈が、普く宇宙間に分泌分派出するのである。此の靈は生魂、足魂、玉溜魂の三つの靈となりて転々分泌分派出しつつあるのである。其の分派出する単一の御靈を生魂といふ。此の生魂は転々層々して無始無終に、幾百千万の生魂が、分泌分派出しつつあるが故に、其の百千万の生魂を称して足魂といふのである。一つの生魂他の十なり百なり千万億なりを吸収したる時は、其の吸収したる十の足魂が一団となる事があり、百の足魂が一団となる事があり、又千万億の足魂が一団となる事があるのである。そして此の十の足魂を吸収したる生魂は、其の吸収したる十の足魂の中に止まりて、主人靈となり、十だけの足魂を統一支配する威力を有するものとなる。かく足魂を吸収し得たる所の生魂は、其の吸収したる處の。十百千万の足魂の中に止まりて、主人靈となり、十百千万の足魂を統一支配することが出来るのである。自ら吸収した

るものは其の吸収し得たる力があるが故に、また自ら之を統一支配する力があるものである。其の吸収し得たる十なり百なり千なり万なりの足魂の中に留りて、主人霊となる生魂を称して、玉留魂といふのである。玉は仮字にて、魂の意である。即ち足魂の中に留りて足魂を統一支配する主人霊なりとの意である。

以上の如く、天之御中主神より直接分派分泌分流する所の霊は、悉くこれ生魂である。其の百千億万無数無限の生魂のある中に於て相互に活動する間に、自然と生じたる中心と分派、根本と末梢との関係より、他を吸収しつつ統一して一团の足魂となり、其の足魂を支配する玉留魂となり、主人霊となりつつあるのである。此の足魂となるものが、各自転々、百千万億無限無数のものとなりつつあつて、之が宇宙ともなり、万有ともなり人間ともなりつつあるのである。相互に主となり、客となり、境地となり、相互に主人となり、境地となり、相互に時間となり、空間となり、相互に千変万化しつつ、無限無数の世界を顕はしつつ居るのである。唯此の三霊は、微細極小の質にして、人間の五感や、化学的機械等にて、分析吟味することは出来ないものである。是れ実に宇宙万有の根本たり、本体たるべき霊である、神である。（『全集二』 p138-139等）

霊を形状から呼ぶ呼び方を「魂(たま)」という。最初に天之御中主から分出分派した霊は、別名「生魂(いくむすび)」といい、これが集まって形なすようになったものを「足魂(たるむすび)」と呼ぶ。さらに、足魂の中にその中核となる部分が生じたものを「玉溜魂(たまつめむすび)」と言う。世界のあらゆるものがこの三段階で形なして成立しているとする。

これも「魂」字にこだわらなければ、世界のあらゆる物理的または生物的なものの成立の段階を説くものとしては、決して「神がかつた」というようなものではない。実際に今泉の説明はこのように非常に明示的かつ物理的であり、隠喩や秘教的な説明は一切行わない。ただ「霊や魂」の文字が何やら宗教じみているという印象を与えるが、古代日本人が「霊(魂)」という言葉で今日の物理学にいう分子原子または素粒子のレベルのものを表現したのだとすれば、別に驚くには値しない。後ほど比べるが、今日の素粒子論とかなり似ている部分があるのである。

ちなみに、「霊」はマともミともヒとも言うのであるが、我が国の思想としては宇宙は

万有悉くがこの「靈」で出来ているのであり、形象・性質の違いはあれど、すべてが「靈」からできているというのが、我が国の世界観だという。「ひ」は「靈」、「日」、「火」等の文字を当てることによって、その性質を推想することができる(例えば「全集二」p 83)。「神」の意味とは「上」とか色々な説明があるが、「か」とは「隠れ」「霞」「微か」「香り」等に共通する性質の「か」であり、「み」とはまさしく「靈」であるから、人の世界から見て「隠れた靈」であり、その神の「御稜威」とは神の「靈出つ(みいつ)」の意味なのである。

「靈」の性質は微細極小であり、人間の五感や、化学的機械等にては分析吟味できないものである。しかし、その分析の出来ぬレベルの極小の共通した存在が物質ともなり、精神にもなり、時間にも空間にもなっているとす。従って、世界は「靈」によって徹頭徹尾、全てができていのである。

以上のような性質を備えた靈魂に関して、今回我々は、今泉が云うところの「西洋の科学に於いては、分析解剖の結果エネルギーといふものを得て居る。我が民族は之を靈といふのである」の文言に従い、どこか掴みどころのない所謂オカルト的「靈魂」ではなく、限りなく科学的にも把握されうるものとして理解しておきたい。

かねて八神殿の解説に申述べた如く生魂 (いくたま)、足魂 (たるたま)、玉溜魂 (たまとまるたま) の活動によつて宇宙万有は生成化育せられるのである。此の三魂は宇宙万有の根本大本体たる天之御中主神の分靈分身分体の神である。それ故天津神の神勅により朝廷にては古より八神殿に奉斎せられたのである。此の三魂の結晶したものを直靈 (なおひ) といふのである。西洋の科学に於いては、分析解剖の結果エネルギーといふものを得て居る。我が民族は之を靈といふのである。而して此の靈から我が民族の靈魂観が出発するのであるが、靈魂といふ文字に拘泥して迷信であるとか、唯心論の一種であるとか思ふのは、<sup>\*10</sup>大なる誤解といはねばならぬ。(『全集二』 p 447)

\*10 今泉は、書物によって「玉溜魂」「玉留魂」と文字が違うことがあるが、同じものを指していると言って良いと思う。

#### 4. 「生成の原理」思想から導かれる哲学とは

それでは、今泉がいう日本本来の「生成の原理」に基づけば、そこからはどのような哲学が導かれてくるのだろうか。まず、あらゆるものが中心的なものから生まれて広がっていくという意味で、中心とその分派の別が生まれる。時間軸でいえば根本—末梢、水平軸で見れば中心—分派という関係が、生み—生まれるの関係で結ばれて、どこまでも同一性を維持しつつ、「修理固成」に導かれて分派はより分派を生み、より発展的に様々な形状・形態を生み出す。しかし、それでも原点たる中心とは常に一致したつながりを持つがゆえに、一体として帰一する。

これは、キリスト教などに代表される思想、すなわち世界を創造主によって「造られた」ものとする、今泉いうところの「存在の思想」とは決定的に異なる点である。すでに創造主とは「別物」として「造られた」ものであるから、創造主から「生まれた」一体性はなく、「個々」別々のものとして「造られた」という性質からも、根本から相互の区別さらには差別が存在する。

すなわち今泉は、我々人間の存在を西洋哲学にありがちな、人間の性質を最上位において序列的な世界の捉え方をするのではなく、あらゆるものに同質性を認めながら、我々人間の存在を人間社会だけでなく同心円的に幾重にも大きくなる、巨大な一体的組織に所属している存在としてみなす。

根本末梢の縦の体系は、斯様な必然的に一元主義に導かれるものであるから、之を横にした中心分派の組織は、又必然に一元に帰する。小さな単位の中心分派組織は、大なる単位の中心分派組織の一分子となり、その大なる単位の中心分派組織は、又一層大なる単位の中心分派組織の一分子となる。斯様に、小なる単位より大なる単位へ秩序整然として無限の中心分派組織を展開し、宇宙全体か、一つの中心分派一体組織であるといふことが、必然の帰結になる。（『全集二』 p 75-76）

このような世界の見方が何に帰着するかといえば、あらゆる森羅万象が自己の存在を中心に観れば、そこから同心円的に広がる幾重もの関係性の輪が見られ、そ

の輪を別の表現をすれば、家族主義的な関係の広がりなのだとと言える。例えば日本人にとってすべての生き物は我々と同じ「情感の通ずる」ものたちという感性があり、仏教的表現をすれば「山川草木悉有仏性」である。つまり、どこか同じ仲間たちという意識があり、それはあらゆるものに神が宿るというアニミズム(天之御中主神の分霊からすべてできているとすれば汎神論的)なものがあり、日本人のあらゆるものへの謙虚な姿勢はこうしたところから始まっているのだと思われる。それは「人間に利用される家畜」として、人間と他の動物等を完全に異なった、利用の対象として認識するキリスト教系の理解とは大きく異なる。

つまり、「生成」思想の帰着点は、宇宙的な広がりを持った真の意味で「八紘一宇」であり、また常に中心を以てまとまる家族主義の重なりなのである。「八紘一宇」は日蓮宗から新宗教団体国柱会を興した田中智学が1903年(明治36年)、「日本國はまさしく宇内を靈的に統一すべき天職を有す」という意味で、『日本書紀』卷第三神武天皇の条にある「掩八紘而爲宇」(八紘(あめのした)を掩(おお)ひて宇(いえ)と爲(な)さむ)から「八紘一宇」としたものである。だが、今泉は田中よりももっと広い意味で、宇宙論的視点からこの言葉を使っている。)

全国民は同一の祖先に帰着し、全人類は同一の祖先に帰着し、全生物界は同一の根源に帰着し、宇宙万有は同一の根源に帰着する。斯く根源を同じくする万有の、一体的存在が、宇宙の実相であるから、宇宙万有同根一体の原理は、宇宙観の普遍の原理となるのである。斯くして、生成思想のみが、真に一元主義に帰着することが出来るのである。 (『全集二』 p 75)

以上のような一体的家族的なあり方を、生成思想の根本中心の原理としてみるから、人間社会においても必然的に家族主義的または一体主義的な関係が真実となり、個人主義や自由主義またはファシズムや共産主義は異質のものと認識される。

また、祖先への感謝の念が強くなる我が国の宗教的心性は、根本一末梢の一体感の自覚であり、幽世にいても我々を見守る存在として死者を見る気持ちも、やはり同根であるという一体感をもつ思想的な表れだということができる。



従って、精神的なレベルでの他の生き物への平等観、また死んだものたちへの一体感、またそれらが帰一する中心的存在があることへの認識、これらの認識こそが日本思想が生み出す日本的感性の根底となっているように思われる。

つまり、日本には宇宙万有同根一体という精神的な共通土壌があるのであり、今泉はそれを日本の古典に基づいた宇宙論による一貫した論理的説明に成功しているのだともいえよう。

以上のことから日本においては、まず個人主義よりも家族主義が本来の姿であり、また家族のそのまた大きな家族が国家となる。そして日本人は大きな家族国家の一員として、我が国の中心である天皇が先祖より継承される、古典にも示された崇高な価値を旨に生きる一体主義的な生き方こそが、祖先垂示の生き方とされるのである。これに対して、強権的な一律法的強制による全体主義的なあり方は、家族主義的内面的なつながりを無視した形式的・抑圧的なものであり、日本の生成思想の求めるものとは合致しない。更に、国家の中心たる天皇を倒し、人民を指導する前衛党の独裁によって、文化的歴史的蓄積を全部否定した人工的社会を目指す共産主義においても同様である。

## 5. 存在思想の限界と生成思想の意義

今泉は日本の生成思想と西洋に代表される存在思想を、世界を説明する上での二大思想としているが、最終的には生成思想こそが真理であるとする。この点については、「科学は漸次に存在思想の誤りであることを指摘して、生成思想に転向して行った。科学上の偉大な発展、発明は、皆此の生成思想の所産である。」(『全集二』 p 77) とし、また「存在思想の哲学的形態は、所謂形而上学であって、その方法は概念的である。人智の発達は、従来形而上学と概念的思考とを以てしては、如何にしても真理に到達し得ないことを人々に悟らせた。」(『全集二』 p 77) とし、科学的にもまた哲学的にも生成思想こそが正しいとする。そして正義や道徳、芸術といったものの真に目指すべき方向も、この生成思想で説明可能だとする。

日本の國體は云ふまでもなく此の宇宙真理をそのまま体顯しているものであるし、科学は科学で一面に過ぎる嫌いはあつても、矢張り同じ天之御中主神を研究して次第に靈の發見に近付かんとしつつあり、法の求むる正義も、道德の求むる善も、芸術の求むる美も総て天之御中主神に發顯還元する靈でないものはない。我々の信仰する宇宙真理に基いてこそ始めて真の正義であり、宇宙絶対倫理こそ善の基礎であり、宇宙真理が表現されてこそ真の美感がある。(『全集二』 p 107)

この視点から、今泉は昭和初期の昭和維新運動において、西洋主義に染まった大学・学者らの学問状況の改善を目指したのであり、日本が面した一連の国家的危機の中で、我が国の行く末に最も良い道を求めんと真摯な取り組みをなし、国家国民を正しき道に導かんとしたのであった。

このような今泉がどのように我が国のあるべき世界のあり方を思い描いていたかを示す一端が下記のものである。

同一根源より發し、相互に有機的関連を有するが故に、万有は各々敬し合ひ愛し合ひ、自性を發揮しつつ宇宙全般の生成發展に貢献すべきものである。ひとり人類のみならず、鳥獸魚介、山川草木、雲烟氣流、日月星辰等宇宙万有一切を神の生みませる同胞と觀じ、その別を認めながらも、これに親しみこれと一体化しつつ生活するところに我が民族の特性が見出され、我が国が大なる和合の国といふ意味にて大和の国と稱せられる所以がある。(『全集二』 p 92)

今泉にとって、いわゆる「八紘一宇」という言葉の意味もこの意味で使用するのが本義なのであり、これとは違う形での説明や、軍事力・権力的な形での支配統治は日本の原理とは違い、そして日本の原理を体現した天皇の精神にも反すると様々な形で発言したのであった。

## 6. 今泉定助の天皇觀

今泉は、これまで述べてきたように我が国の生成思想を、国家論(國體論)そして人生論と極めて統一的体系的に論じた人物であり、その一貫性・透徹性は他の神道者の遙かに上をいく画期的なものである。ここでは、その中でも我が国においては国家論の真核にある今泉の「天皇論」について國體論とともに概観しておきたい。

まず、天皇論の前提となる今泉の国家論(國體論)の特徴を再確認すると、宇宙の始まりとともにある天之御中主神がどのような意図・原理で此の宇宙を始めたのか、そしてその宇宙の中でどのような過程でその意味を伝えてきたのかを明らかにしようとする点から始める点にある。そしてそれは、先祖の語部が潔斎し禊祓・鎮魂等の行を通じて神人合一した境地で垂示された古典の探求から知ることができるのであり、具体的には神勅という形で我々には示されているとする。それでは、天之御中主神から始まり神々に継承されてきた意図とは何かといえ、「修理固成」であるとする。修理固成とは「古事記」において天津神が天沼矛を伊邪那岐・伊邪那美に賜ったときに命じた「修め理り固め成せ」という言葉であり、あらゆるものを成す場合の原則であり目的を表した神勅だと言えよう。今泉はその他の神勅として三大神勅(天壤無窮、齋鏡齋穗、神籬磐境)を挙げて、詳しく解説しているが、この三大神勅の趣旨・目的をまとめれば「修理固成」となるのである。

ここに天つ神諸の命もちて、伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱の神に「この漂へる國を修め理り固め成せ。」と詔りて、天の沼矛を賜ひて、言依さしたまひき。故、二柱の神、天の浮橋に立たして、その沼矛を指し下ろして畫きたまへば、塩こをろこをろに畫き鳴らして引き上げたまふ時、その矛の末より垂り落つる塩、累なり積もりて島と成りき。これ淤能碁呂島なり。『古事記 上巻』

修理固成の神勅は、産靈の大精神の表現であり、これやがて天津日嗣の實質内容である。これより君民一体の大義が生じ、天皇は全国家、全国民生成化育の御本源として、宇宙の直理を人生社会に実現し給ふのである。これが為めに万世一系であり、天壤無窮である。天壤無窮は結果であり、外観である。それには斯くなければならぬ原因があり、内容があるのである。(『今泉定助先生研究全集三』 p 315以下『全集三』)

今泉によれば、天皇とはこのような天之御中主神から代々の神々に神勅を、直接的に受け継ぐ正統な継承者にして、その神勅の最大の実践者なのだとする。そして天皇が継承されている、その宇宙的真理を实践展開する道こそ日本の國體であり、我々日本人はその國體を天皇と共に君民一体となって実践していくことにこそ、生き方の根本を支える道理があるのだとする。

日本という国は、基本的にそうした使命を負った国なのであり、我々はそうした務めを果たす日本人に「成る」ことが大事であって、皆がそのために禊祓を実践しながら天皇が引き継がれた垂示を自分のものとしようとするとき、日本人として生きることが完成される。

君民一体の原理は、我境一体、彼我一体、宇宙万有同根一体、中心分派帰一一体等の諸原理と同様に、一体原理の表現である。此の一体原理は、我が民族意識の基礎をなすものであつて、哲学的に、科学的に、政治経済的に、倫理道徳的に、皇道国家の基礎観念をなすものである。然るに此の原理は、西洋思想の相対主義に慣れた人々には、了解されることが甚だ困難である。「我と彼とは如何にして一体であるか」、「治者と被治者との一体は如何にして可能であるか」と云ふやうな、質問を屢々聞くのはこれが為めである。(『全集三』 p338)

我々にとって天皇が大事なものは、外国の君主のような権力的な権威ではなく、真実の宇宙の原理の体現・継承された方だからであり、我が国の國體の具現化された方だからである。「祖神」と「祖国」と「民族」が三位一体で今日まで残っている国は日本だけであり、この家族国家の「大家」に当たるのが天皇であり、我々はその大家の「家の子」の関係にある。このような紐帯は戦後日本の教育をうけてしまった時代では、なかなかそう悟れるものではないが、今泉が天皇を思想的にも日本の生成思想の中核として位置づけ、その尊さを誰よりも深く理解していたということはいえるのではありませんか。

古来朝廷のことを「おほやけ」と云ふ。「おほやけ」は即ち「大家」であつて、之に支那の「公」の字を充てたのは誤りである。「公」は「私」に対する文字であるが、我が「おほやけ」は私に対する言葉ではなく、大なる家の意であつて、民族全体の本家、宗家を意味するものである。朝廷の「おほやけ」に対して、臣民のことを「やつこ」と云ふ。「やつこ」は「家の子」の意である。之に支那の「奴」の字を充てたのは間違ひである。奴は即ち奴隸であるが、我が民族は上より圧迫せられて使役せられる奴隸ではない。「家の子」即ち大家の家族であり、本家、宗家の末家、末孫として、家長と一族、一団をなすものであると考へたのである。漸くの如く、「大家」といひ、「家の子」といひ、皆「家」の観念であつて、国即ち家であり国民即ち家族であるといふことが、我が民族の國體に関する基礎観念である。(『全集二』 p432)

天皇は国民に対して、常に親心で御臨みになり、大嘗祭の最後に行はせらるゝ大饗によつて、国民全体に対して、生活の保証を遊ばすべき、大御心を顕はし給ふのである。此の

大御心を大臣も知り、知事も村長も知り、代議士も国民全体も知り、大饗と云ふことは、かゝる大御心のあらはれであるといふ事を、深く認識して居たならば、失業者などの起る筈がない。現在のやうに民心が不安に陥るやうな事はあるべきでない。万一落伍者があつたならば、かくては畏多くも天皇の大御心に背くゆゑ、しき大事であると、国民全体が互に援助して、失業させてはならないと云ふ風にならなくてほならないのである。天皇の大御心が此処に在り、国体の根本が此処に在ると云ふことを、国民全体が知つて居つたならば、ルンペンが何十万あるといふやうなことを云つて、呑気な顔をして居られぬ筈である。皆努力して天皇の大御心に副ひ奉り、国体の根本を破壊することを阻止しなければならぬ筈である。(『全集三』 p 340)

ここには、西洋の画一的博愛主義とは異なる、「家族」を中心とする輪の広がりの中で、この世界には絆(縁)の遠近・濃淡があることを率直に自然の摂理として認めている。そしてこの万物に関わる「家族」思想とともに、今泉は中心に帰一することによる宇宙全体の秩序の整然とした成立を指摘している。中心があれば、そこからの上下の区別や親疎の違いも生まれるがゆえに、機械的な平等意識にはびこりやすい悪平等や恣意的な悪差別との違いを見ることができる。例えば、親子など近親の関係の助け合いは、他者への関係より強く親しいことが求められるのであり、家族と一般の社会の人びとを機械的に平等視して、家族解体を以て進歩したかのような見方こそが悪平等なのだとして分別することになる。人によって高低様々なレベルの価値判断があっても単純にそのまま肯定し、個人が自分の価値基準で何でもやってよいかのような平等主義は、共同社会という人間の生きる本質を考えれば実に危険な価値思想である。例えば今日のリベラルが、「移民」においてこの点の差異を認めずに受け入れ、大きな混乱と「西洋の自死」という不幸を招きつつあることを考えれば、その危険性がいかにリアルなものであるかがわかるだろう。その点で、人の関係における濃淡の差異を差別ではなく自然な区別として率直に認める思想は、実に健全で現実的である。差異を抑圧するがゆえに混乱が起こりやすい近代にこそ、改めてこのような今泉の価値基準軸へのまなざしは学ぶべきものがあるだろう。

## 7. 以上のまとめ

今泉の生成論は、宇宙論から国家論・家族論・個人の生き方論まで、一貫した論理を通す構造となっている。のちに見るように、ラズロの思想にも宇宙論から生物論そして人間の意識論まで一貫したものがあり、一貫性の説明において、近似する所があることを指摘しておきたい。

ここで、以上の今泉の思想を簡単にまとめておきたい。

- 1 ) 世界の始まりは天之御中主神によって始まる。天之御中主神が造ったのではなく、自己の分身分霊を生みなすことで、拡大し伸張したものである。
- 2 ) 世界はこの生み一生まれるの関係で、すべてが繋がっている。だから、宇宙万有同根である。
- 3 ) 天之御中主神から生まれた神々は、皆同じ志向原理を有して生まれており、この点でも一体である。
- 4 ) その原理とは、別天津神から伊邪那岐命・伊邪那美命に天沼矛を授けたときの詔「修め理り固め成す」という世界を修理固成していくことである。あらゆる物事は修理固成していくようにできている。これを別名「産霊(むすひ)」ともいう。
- 5 ) 修理固成をなす上で、物事は常に発頭する方向に進むことと、常に原点に回帰還元する方向の、両方の働きが働いている。前者を高御産巢日神と呼び、後者を神産巢日神と呼んで、この2つの動きを天之御中主神の次に誕生した原理を担うものとして概念化している。
- 6 ) 天之御中主神の分身分霊を、生霊(いくむすび)という。生霊は極小にして、少なくとも20世紀前半(今泉の時代)のレベルでは人間には検出することは不可能なレベルのものである。世界はこの生霊を共通にしている点で同根一体であり、この生霊がそれぞれ修理固成するものとして時間・空間・あらゆる物質そしてあらゆる精神的なものを形成している。
- 7) 世界の生成発展は中心からの分派または根本から末梢という基本的な流れの中で形成されており、そこには一種の価値秩序が生まれるようになっている。これ

らは常に生み・生まれるの関係で結ばれる中で生じ、根本は皆同じものから生まれた存在である。そして常に価値は根本にある中心的共通的価値と、分派の中にある個別的個性的価値が両方ともあって、初めて調和する形で形成されるがゆえに、それぞれが対立差別されるものではなく、一体となって価値の体系を形成する存在として帰一一体である。

#### 第4章 今泉定助の思想はなぜ普及したのか

ここまで今泉の思想の主な特徴を拙いながらまとめてみた。今までまとめた以外にも、今泉の教育論や禊行論など、色々まとめてみたいことはある。

だが、目下一番気になることは、今泉が大正10年に川面凡児の禊行に参画して以来、画期的に前進したその神道理論と国体論が、なぜあれほどに人々の心を掴んだのかという点である。仮に何もなければ、新しい神道理論が一つ生まれた程度で終わったと思われるが、時代が今泉を必要とし、今泉自身も自分達神道人の発言が、こんなにも世の中に普及することは数年前まで思わなかったと、昭和12年の論文の「文部省の「国体の本義」を読む」中で書いている。

今回文部省から発行せられた「国体の本義」を読んで、先づ感ずることは、教学の指導精神が、一大転向をなしたといふことである。斯様な著述が、文部省の名に於て出版せられるといふことを、奇異に感ずる人々も多いであらう。数年前までは、此の著述の根本思想をなしてゐる諸論点を主張した吾等は、官界、学界等から異端者を以て目され、頑冥固陋なる復古主義甚だしきは危険思想とまで定されたものである。然し、真理は何処までも真理であつた。

事実は何処までも事実であつた。思想界、学界に占拠して、学者とか、知識階級とか称した、大多数の西洋追従者の論説こそ、真に異端邪説であつたのである。その後、内には満洲事変を突放とする民族精神の覚醒、機関説排撃問題に端を発した国体明徴運動、外には個人主義の世界的行き詰り、対立思想に基く社会改造に対する絶望等、内外幾多の原因に動かされて、国民思想は次第に国体精神の常軌に復し、遂に文部省の官選公刊物が、吾等の多年主張した根本思想の域内に到達したことは、誠に歡喜の至りである。『全集二』 p 203)

下記の年表で確認しても、まさしくこの昭和12年前後の日本は、経済的軍事的に生き残りを賭けた危機の時代であり、大正時代とはかなり趣が変わっていたことは確かである。

昭和元年(1926年): 12月25日、裕仁親王が踐祚。昭和と改元。
昭和2年(1927年): 昭和金融恐慌
昭和3年(1928年): 張作霖爆殺事件、男子普通選挙実施
昭和4年(1929年): 世界恐慌
昭和5年(1930年): 金輸出解禁、ロンドン海軍軍縮会議
昭和6年(1931年): 満州事変、金輸出再禁止
昭和7年(1932年): 満洲国建国、血盟団事件、五・一五事件
昭和8年(1933年): 明仁親王誕生。滝川事件、国際連盟脱退
昭和9年(1934年): 陸軍士官学校事件
昭和10年(1935年): 天皇機関説事件、相沢事件
昭和11年(1936年): 二・二六事件、日独防共協定締結
昭和12年(1937年): 支那事変勃発、日独伊防共協定締結
昭和13年(1938年): 国家総動員法制定
昭和14年(1939年): ノモンハン事件。第二次世界大戦始まる。
昭和15年(1940年): 大政翼賛会結成、日独伊三国軍事同盟締結
昭和16年(1941年): 日ソ中立条約。12月8日、大東亜戦争開戦。
昭和17年(1942年): シンガポール、フィリピン等を占領。ミッドウェー海戦
昭和18年(1943年): ガダルカナル島撤退、アッツ島の戦い、第一次～三次ソロモン海戦、出陣学徒壮行会
昭和19年(1944年): インパール作戦、マリアナ沖海戦、レイテ島の戦い。B-29による東京への空襲始まる。

日本にとって、この時代は4つの危機への対応が迫られた時代であった。第1に、大恐慌等に端を発した経済ブロック化の波である。ブロック経済によって輸出が阻まれるなかで、日本は経済的生き残りをかけた生き筋を見出さなければならなかった。具体的には満州建国がその解答となる。第2に、第1次世界大戦当時から、軍事は総力戦を以て戦う時代になっており、経済規模が小さくかつ資源に乏しい国家にとっ



ては、如何に総力戦体制を築くかが国家存続のための大きな課題となっていた。日本の軍人達は、特に統制派と呼ばれる一団がこの課題に対して「高度国防国家」という名の、国家社会主義的体制にその解答を見出そうとしていた。だが、これは天皇を傀儡化して帝国憲法も改廃していくことが必要であり、実際の中身はコミンテルンの影響からか社会主義者の革命計画と同じ意味を持つものになっていた面がある。

そして第3の危機が、このコミンテルンに代表される日本の天皇を廃絶して歴史的に成立した國體を改廃して、従来にない共産主義社会を形成しようとする無政府主義者・国際共産主義らによる国家体制破壊工作である。大正14年(1925年)に制定された治安維持法は、昭和3年(1928年)に改正されるなどして、國體破壊活動への防御が図られたが、現実にはマルクスをはじめとする社会主義関係の出版物は盛況を呈しており、大学においても共産主義の普及は著しいものがあった。すでに1910年代前半より、各大学・高校・専門学校などでは社会科学研究会(社研)が組織され、大正13年(1924年)9月には49校の社研が参加する学生社会科学連合会(学連)が発足し、またたくまに会員1600名を擁する大組織に成長してマルクス主義の普及・研究を標榜するなど、大学人だけでなく学生たちへも共産主義は非常な勢いで拡大し、明治時代では考えられなかった、日本國體否定の思想普及への切迫した危機感を感じていた時代であった。

第4は特に東アジア情勢の危機である。1926年(昭和元年)頃から始まった、国民党政府によるコミンテルンも絡んだ国際法無視の「革命外交」路線に対して、幣原外交が行った一方的譲歩は、結果として今日の尖閣諸島での日本の正当な主張を捨てた譲歩と同じく何の友好的関係ももたらさず、逆に相手の増長を日本に対してもたらすだけであった。こうしたことから起こった満州事変以降、日本の東アジア大陸における外交は、米国等との摩擦も大きくして、明治維新以来の大きな国家的危機をもたらしていた。

つまり、今泉の思想が求められた時代とは、近代日本が日英同盟等の同盟関係も

失い、国際連盟も脱退し、自分の生き筋をすべて自分だけで見出さなければならぬような状況となっていた時代であり、自分のみを頼みに生きて行かざるを得ない時代であった。このような状況を考えれば、神道という自国の原点から導きだされた思想が、日本国家を支える思想的支柱になることが求められる歴史的必然性があったのだと考える。今泉の著作が特に昭和10年代から次々と出版される状況になっていたのは、それを求める社会的・政治的環境があったからであった。

しかし問題となるのは、今泉の思想は今日の我々にとってどのような意義があるのか、である。すでに時代遅れの全体主義思想(これは誤解であるが)であり、一種の迷信的なものであり、日本の敗戦と共に歴史的役割は終わったものなのか。それとも、日本の再生につながる何か今日的な意義があるのか、これに対して一定の解答を見出さない限り、今回の論考の意義はあまりないということになろう。そこでこの点をテーマに以後は検証していきたい。

## 第5章 宗教に対する科学的検証の可能性

「古事記」に代表される日本の思想「神道」にもとづく今泉生成論は、宇宙から個々の生命さらには精神まで一貫したものとして説明するものであり、実に壮大な体系をなしている。これは今泉が見出したものであっても、それはまさしく日本の古典に基づいたものであり、いわば日本民族の思想と言っても良いだろうし、今泉自身もそういう視点で自己の思想を語っている。この思想を今泉は幾つかの著作で西洋科学によって発見された最新の知見に基づいて説明を行っており、かつ科学の知見が深まれば深まるほど日本思想の正しさが見えてくると述べている。

そこで検証してみたいのは、今泉の見出した生成論と同じような思想を語る現代の思想はないのか、という点である。その現代の思想が今日において存在意義を持つものであるならば、今泉の思想も同様にその価値を備えていると言えるだろう。

従って、今回の検証で用いるべき思想は、今泉も指摘しているとおりに科学の知見

に照らされた思想が最も相応しい。1920年代中頃の量子力学の成立以来、この分野の物理学者たちは東洋思想をそれぞれ深く探求していることに大きな特徴をもつ。ニールス・ボーアは道教や中国哲学、シュレーディンガーはヒンドゥー教の哲学、ハイゼンベルクは古代ギリシャのプラトンの学説を研究している。また、現在生存している研究者としては、ブライアン・ジョセフソン(英 1940ー、超電導研究で1973年ノーベル賞)が東洋思想の中でもTM瞑想を実践し、マハリシ・マヘシ・ヨーギをグルとし、その世界観を科学的に検証しようとするなどした。そして1980年代にはニューサイエンスの言葉が盛んに使われ、科学と宗教は相互の交流の中から、より統一的な説明を求めて研究が行われている。

これに対して、未だに東洋思想の1つである神道思想と結びついた研究はなされてはいないが、もしかしたら探求に価するものが神道思想(特に今泉の思想)に見出される可能性はある。

ただしこの流れは、一方においては何やら怪しげな疑似科学的なものを生み出し、根拠を科学に求めても実際には眉唾な研究も多くあることから、宗教を科学で説明しようとするればこの俗説的な流れの1つと判断される危険性はある。こうした傾向は、特に主観的な超心理学的部分の説明において見られる傾向があり、また技術(または商品)として売りだされるものの説明においてよくみられることであるように思う。従って、今回の検証においては、特に物理学的な知見に基づくものとし、あくまでも科学的説明として検証のある範囲で試みたい。

## 第6章 比較対象としてのアーヴィン・ラズロの思想

今回今泉の思想の科学的妥当性を探るために、比較として用いたのがアーヴィン・ラズロの思想である。ラズロのプロフィールは以下のとおりである。



Ervin Laszlo, born 1932 in Budapest, Hungary, founder and President of the Club of Budapest, was one of the first representatives in the area of systems philosophy and general theory of evolution. He published more than 70 books translated into as many as 18 languages. In the course of his long academic career as a professor for philosophy, systems philosophy and future sciences, he worked in teaching and research at a variety of reputable universities in the US, Europe, and the Far East.

Laszlo publishes a quarterly scientific journal (WORLD FUTURES: The Journal of General Evolution) and a corresponding book series. He also edited a four-volume encyclopedia. Over 400 articles were published in newspapers and magazines worldwide, including the US, Europe, Japan, and China.

His titles and distinctions include a Ph.D. in "Lettres et Sciences Humaines" from the Sorbonne in Paris, an "Artist Diploma" from the Franz Liszt Academy in Budapest, an honorary medal from the Kyung Hee University in Seoul, the title of honorary doctor in economic sciences of the Turku School of Economics and Business in Finland, as well as the title of honorary doctor in the area of human sciences of the Saybrook Institute in San Francisco.

<http://www.clubofbudapest.org/p-amb-laszlo.php> より

このラズロの思想が分かりやすくまとまった部分を紹介すると以下の通りである。

- ・ 現在、科学の最先端で、注目に値する一つの洞察が登場しつつある。それは、宇宙は、そのなかに存在するすべてのものと共に、生物にも似た一貫性を持つ一つの総体をなしているという洞察だ。宇宙に存在するすべてのものは互いに結びついている。ある場所で起こるすべてのことは、ほかの場所でも起こる。あるとき起こるすべてのことは、ほかのすべてのときにも起こる。そして、かつて起こったすべてのことの痕跡は、消え去ることなく永らえる。今日ここにあって明日は消えてしまうような、完全に無常なものなど存在しない。(中略)
- ・ 物質の振舞いを理解すればすべてを知ったことになるという、かつての物理学やマルクス主義理論に共通する信念は、詭弁以外の何ものでもない。こうした考え方は今や完全に時代遅れとなった。宇宙は、科学者、技術者、マルクス主義者たちがかつて推測していたよりもはるかに驚異的である。また、宇宙の相互結合性と一体性は、SF作家の想像力をはるかに超えて、深く徹底的なものだ。(中略)
- ・ 今この時期に宇宙の全一性が見出されつつあるのは、観察し、実験によって検証するというプロセスに基づいて長年研究が続けられてきた成果である。(中略)

・ わたしたちは、お互いの、そして自然の、一部である。わたしたちは、一貫性をそなえた世界の、一貫性をそなえた一部である。その点に関しては人間も、一個の素粒子、恒星、銀河とまったく同じだ。それらとわたしたちとの違いはただ一つ、わたしたちは世界のなかの意識を持った一部、これを通して宇宙が自らを知るようになる一部であるという点だ。この洞察は、生きることのより深い意味を再発見するための、そしてさらに、今という歴史の重大な岐路に必要な、より信頼性の高い新たな指針の確固たる基盤となる。(中略)ラズロ『生ける宇宙』p2-5

ラズロの思想の特徴は、科学的研究の成果を踏まえた世界観を形成しつつ、トランス・パーソナル心理学などの人間の精神に関する研究を重ねていくものであるが、基本は科学研究の成果をまとめる方にあると思われる。科学的成果を元にそれが何を指し示しているのかが哲学的によくまとめられており、文系にも読みやすい。そこで今回は、今泉の一連の著作中でも最も理論的にまとめられているとされ<sup>\*11</sup>、かつ科学的説明の多い『國體原理』(昭和10年立命館大学出版部)の第五章「生成化育論」を中心に、その世界生成思想をラズロの宇宙論他と比較してみたい。

なお、途中何名かの科学者が出てくるが、すべてラズロの著作からの紹介であり、他にも非常に多数の科学者が紹介されていることから、このことはラズロの研究がかなり本格的な調査をした上であることを間接的ながら証明している。

## 第7章 今泉自身による科学的説明 I 物理現象について

### 1. エネルギーという同根一体

では、以上述べたことを『國體原理』の第五章「生成化育論」において、今泉がどのように科学的な説明を行っているかを次に取り上げたい。そして今泉の説明内容と、現代の先端科学がどのように符合しているのかを確認したいと思う。

それでは最初に、以下の書き出しで始まる部分により、元素配列、原子の構造(ポー

---

\*11 『全集三』p21 高橋昊氏の説明による

アの学説)における原子核と電子の関係、さらにラザーフォードによる原子核内部の説明を確認する。

次に此の原理、此の思想が如何に宇宙の絶対真理であるか、近世科学の研究の結果を通観して、其の普遍性を証明することにしよう。宇宙万有は、動物、植物、鉱物、有機物、無機物等の分類による物質と、感覚、感情、意志、理論、思想等の精神と、此等に共通な時間、空間、因果律等の形式とに、三大別することが出来る。先づ物質界に就いて、万有同根の原理が如何に証明せられて居るかを見よう。一切の物質は、(以下省略 『全集三』 p387)

上述のとおり、今泉の視野が物質・精神・時空間の全てを視野に入れた論の展開であることが、この章では示されている。

上記説明を踏まえて、この物質世界について次のような指摘をしている。

従つて物質粒子はエネルギーの塊として考へられ、物質の概念はエネルギーの概念に帰せられることになつたのである。ここに於いて、一切の物質が同根一体であると云ふことは、頗る明瞭である。同じエネルギーが質量となり、或は速度となつて、宇宙万有を顕現する。而して質量と速度とが、相対的に変化すると云ふことは、電気力学の論証する所である。之によつて物質の観念、旧式の唯物論等は、根底から覆されたのである。何となれば、それ等は質量不変の定則を基礎観念となすものであつて、物質と云ふ言葉自体が、質量を意味するものだからである。斯くて吾人は物質界を一貫する重大なる真理に直面した。即ち万有は本来同根一体であるが、その運動速度によつて、有らゆる種類の差別相を顕現し、又平等相に還元すると云ふことである。例へば動物、植物、鉱物として論ぜらるゝ静態に於いては、物質の種類は幾万幾億なるやを知らず、文字通り千態万様である。それ等が化学変化の速度に至れば、前述の如く九十二種類の元素に還元される。更にそれ等が電子の速度に至れば、同根一体のエネルギーに還元されるのである。(『全集三』 p388-9)

「同根一体のエネルギーに還元される」という意味は、「西洋の科学に於いては、分析解剖の結果エネルギーといふものを得て居る。我が民族は之を霊といふのである。而して此の霊から我が民族の靈魂観が出発するのであるが、靈魂といふ文字に拘泥して迷信であるとか、唯心論の一種であるとか思ふのは、大なる誤解といはねばならぬ。」

(全集二』 p447) ともあるように、「霊(ひ)＝エネルギー」という認識において、霊学ではなく物理的な説明でも、宇宙の真理は同根一体であるということになる。そし

て科学は進歩したがゆえに、やっと日本の古典が語る真実に追いついてきたという視点でこれを見るのである。これが不遜な思い込みに過ぎないのかどうかを、ラズロが示す現在の科学に照らして見るのが目的である。

さて次に、今泉は物質界の見方を三つの層を二つの相に分けて見る見方を説明する。

此処に一つの木片がありとせよ。此は植物として植物分類学上の一つの名称を与えられるであらう。それと同時に、此は一つの有機化合物として、分子式或は構造式を与えられるであらう。それと同時に、これは電子及び陽核の運動の態様として、近時の量子力学を以て律せらるべきものである。第一、第二の場合は差別相である。第三の場合は平等相である。第一の場合は皮相の観察であり、第二の場合はやゝ深刻なる観察であり、第三の場合は最も深刻透徹なる観察である。而して宇宙万有同根一体の原理は、此の第三の観察に於いて、始めて了解されるのである。(『全集三』 p389)

今泉がいう電子・陽子レベル(エネルギー界)、原子・分子レベル(原生界)、植物分類レベル(副生界)の三界の中で、世界が同根一体であるのは最も深層のレベルといえる「エネルギー界」の見方においてである。この世界はすべてが平等相として見る事ができる。これに対して、最も皮相のレベルにある副生界はあらゆるものが多種多様の違いをもって存在しているものとして把握される世界である。この段階ではあらゆるものに個別性を見出す差別相の世界となる。世界をこのようにどの段階から見ることによって、その世界の価値基準が変わるという認識は、これから今泉の考え方を理解する上で重要な鍵となるので押さえておきたい。

## 2. 時間・空間について

時間と空間は、相対性理論から明瞭にこの2つは関連し合っていることを説明し、世界を構成する4次元において、時間空間は数学的には本質的な区別はない、入れ替え可能なものとして認識できるとする。

時間及び空間の相対性は、相対性理論の基礎をなすものであるが、従来は時間と空間とは、

互に独立なものと考へられて居た。即ち一つの事件の空間的位置を空間坐標X、Y、Zで与ふれば、X、Y、Zの轉換は時間Tに無関係であると考へられて居たのである。然るにローレンツ轉換に於いては、X、Y、Zの轉換式はTをも含み、同様にTの轉換式はX、Y、Zをも含む。即ち時間と空間とが関聯するのである。而して此の轉換式は、此等四個の変数の一次式であるから、数学的にはTとX、Y、Zとの間に本質的の區別は存在しない。従つてX、Y、Z、Tの四次元を持つ空間を考へ、電子、物体、エネルギー等、空間内の位置を点で代表さすことが出来、且つ一般に運動するもの、時間及び空間の位置を、此の四次元空間内の一点として表すことが出来る。これが所謂世界点であつて、此等の物の運動は、此の空間内の線で表され、之を世界線と稱して居る。此の四次元の時空が、現代物理学の与ふる世界像である。(『全集三』 p392)

そしてこのような4次元の時空及び物質は、本質的に同根一体であると説明する。

さて此の世界像、宇宙の眞の姿と看做される四次元の時空の本質は如何なるものであるかに就いて、近世物理学は、時空が物質と不離の關係にあるものであると説くのである。一面より云へば、時空の計量的性質は、物質によつて定められるのである。即ち時空は電子又は陽核の電磁場であつて、旧式理論に於けるが如き等質、等向なものではなく、電子又は陽核と電磁場とは、互に独立に存在するものではないと云ふのである。電子又は陽核のエネルギーと、電磁場のエネルギーとは、全く區別することが出来ないものであるから、時空は電子又は陽核を中心とするエネルギーの拡張であると云ふことに帰着する。即ち、時空と物質とは同根一体である、と云ふことになるのである。(『全集三』 p392)

時空及び物質も、電子又は陽核を中心とするエネルギーの拡張であると総括し、エネルギーという同じ一つのもので説明ができることを指摘している。従つて、先程述べたエネルギー＝靈(ひ)という理解で言えば、時空及び物質は総てエネルギー(靈)が形を変えているだけであり、根本的には全てが同根一体という理解につながる。さらに、次のように述べて、アインシュタインの光量子のような理解が、日本が直観でつかんだ理解に追いついてきたと評価する。

プランクが創唱した作用量子の考へ、アインシュタインが之を拡張した光量子の考へは、我が靈魂觀の基礎をなす靈子の考へに接近するものであつて、此の靈子は生魂と稱へられ、それ自身が



単一不可分の微粒子で、生成発展の原素となるものである。宇宙万有は此の微粒子の発顕と還元、集合と分散との態様であると見るのが、我が靈魂觀の基礎原理であつて、科学は数千年間の実験と理論との努力を経て、漸く我が靈魂觀に接近する正常な宇宙万有觀に辿り着いたことを示すものである。(『全集三』 p 394)

アインシュタインが光量子なるものを考えたのは、我々の目に見える世界とは全く違う量子的世界の説明を行うためであり、この光量子という認識は日本の思想としての靈子または「生魂」として捉えることができる故に、この量子的世界の解明に当たる量子力学こそが、日本の思想を適切に表現できる科学知となるのだとする。

さらに今泉は、機械的宇宙觀を形成した古典物理学的世界觀から量子力学的世界觀に轉換することで、世界觀が「抽象的・独断的な決定の世界觀」から「具体的・統計的な世界觀」に轉換したこと、そして轉換後の世界觀はエネルギーの性質で世界を捉えたものに他ならないことを説明する。そしてこの新しい世界觀から見えてくることこそが、日本思想の根本にある万有同根一体の真理なのだと言泉は考える。

量子論は最近十年間に、新量子論として目覚ましい発展を見せた。ドブローリーは物質粒子に波動的性質を附して、之を物質波と称し、此の物質波にエネルギーが配属して居ると考へたが、シュレーディンガーは此の考へを更に発展させて、数学的解説を与へ、物質粒子は物質波の群団であると考へ、之を波動力学の基礎觀念となし、波群の振幅に就いて所謂振幅方程式を導き出した。一方ボルン、ハイゼンベルヒ等は、物質波の本質が実際に空間中を伝播する波ではなくして、物質粒子の存在の確率を示すものであると説き、物質粒子を波動的のものとは考へずして、そのまゝ粒子と考へ、振幅函数は粒子が空間内の斯くおのおの場所に存在して居るだらうと云ふ、存在確率を示すものであると主張した。此の存在確率は無限に多くの坐標を作るから、此等を二次的な表式に綜合して無限マトリクスとなし、此のマトリクスの算法によつて、量子現象を論ずるのが、所謂マトリクス力学である。

此等の新学説は、旧式の理論と根本的に異なる所がある。即ち旧式理論に於いて一つの質点と看做されたものが、新学説に於いては波の群団と考へられ、旧式理論に於いて一つの数を以て表された事項が、新学説に於いては数の群団たるマトリクスを以て表されるのである。而して此の群団は実験の結果に準拠して、總べて統計的のものであるから、此の傾向は要するに従来の抽象的、独断的な決定が、具体的、統計的な実証に移つたことを示すものである。

斯くて物理学的現象は、非連続的な諸要素の統計的計算によつて代表せられることとなり、因果律はその本来の意味を失つて、確率にその地位を譲つたのである。因果律とは要するに、エネルギー活動の確率を概括的に表示する模型に過ぎない、と云ふことが知られるのである。云ふ迄もなく、確率はエネルギーそのものの性質に基因するのであるから、因果律、合法則性等も亦精神、物質と共に、エネルギーを根原とするものであつて、万有同根の原理に漏れるものでないこと云ふことは明かである。(『全集三』 p394)

このエネルギーの次元で世界を捉える視点は、現代物理学でも見えてきた有力な世界像の1つだと言つていい。以下はラズロの指摘である。

すでに見てきたように、物質は空間——もっと正確には、空間を占めている真空が持つ普遍的なゼロ点場——が生み出した産物の一つだと考えるのが適切である。私たちの世界に存在する確固たるものに思える物体、あるいは私たちの身体をつくっている筋肉や骨は、「物質」と呼ぶにふさわしい分解不可能な建築素材で組み立てられているわけではない。私たちが物質と考えるもの——科学者たちが慣性や重力の特性を備えた質量と呼ぶもの——は、宇宙に浸透したこの場の奥底で行なわれる微妙な相互作用の結果生じたものである。この新しい世界観では、「絶対的な物質」というものは存在せず、あるのはただ絶対的な物質生成エネルギー場だけなのだ。『創造するコスモス』ラズロ p257

この種の世界観は常識をひっくり返したように思えるかもしれないが、よくよく考えてみると、現代物理学の標準的な概念より、私たちが実在の本性について日常前提としていることの方に近いことが分かる。例えば、量子場について考えてみれば、それはもはや単なるポテンシャルを記述する純粹に観念的な実体ではなくなる——それは現実世界の粒子や物体を相互結合させている物理的な実体である。そう考えれば、物理学の初級クラスの学生を悩ませる抽象化の作業ももはや不要となる。光や重力は何もないからっぽの空間を伝える幽霊のような波ではないのだから。時空は、アインシュタイン流の幾何学の対象物であるだけでなく、基本的な物理的実体でもある。それは攪乱させることが可能な——パターンや波動を形成できる——媒質で満たされた空間である。光や音はこの連続的なエネルギー場を伝える波であり、テーブルや樹木、岩やツバメなど、確固としたものに見える物体も、この空間内に静止した波である。 同 p259

そして私たち自身、すべての人間、すべての生物、すべての非生物も、目には見えないが物理的実在である宇宙のエネルギーの海に存在する複雑な静止波なのだ。 同 p260

このようにすべてをエネルギーの成り立ちとして捉えることで、科学的にも世界は同根一体であり、全てが結び付きを持った存在であるという世界観が成立する。これ

は、今日の時代状況にとっても極めて重要な視点なのではないだろうか。

### 3. 中今の思想と量子力学的時間

次に時間論については、「中今の思想」が説かれる。

時間、空間、因果律に就いては、なほ多々云ふべきことがある。此の三つを絶対的な、根原的なものと見ることは、既に述べた如く、機械学的宇宙観や唯物論の基礎をなすものである。而して我が古代思想も亦時間、空間の確立した観念の中に、発展したものであると述べる人もあるが、それは誤りである。第一に時間に就いての日本人の考へ方は、過去、現在、未来と三世に分つて之を流動的に考へるのではなくして、山田孝雄氏の説かれた如く、中今の思想である。只今が時間の中心であると考へるのである。之を科学的に云へば、現在と云ふ瞬間が坐標系の原点になると云ふ意味である。而して此の思想こそは、近世物理学が劃期的の着眼点となす所なのである。『全集三』 p 395)

「中今の思想」とは、「続日本紀」の宣命8世紀頃の詔勅に4例ほど見える言葉であり、神道のものの考え方を良く言い表した思想とされる。これは、今の一瞬において懸命に自分なりに生きれば、それは過去と未来も同時に祝福することに成るという思想である。それは古語において必ずしも強い思想性があったわけではないが、大正期以降の時代において、日本の過去未来に囚われず、今現在に集中し精一杯今の生を生き切るという感覚を重視する生き方として原理日本社の三井甲之などによって再発見的に使われた言葉である。大正期以降、昭和において提唱された日本主義の一つの思想と言える。

しかし今泉がここで日本の思想として紹介する「中今の思想」は三井甲之と似ていても、上記のように特にイデオロギッシュではない。今泉の「中今」とは、時間は過去→現在→未来という縦の流れでは無く、並行してすべてが同時に存在しているので、今の瞬間がすべての時間の意味を決定するのであり、つまり今現在をきちんと生きれば、過去も未来もすべてが活きた時間になるという意味である。時間の意味・価値は、過去も未来も今現在の生き方に左右されるという意味であり、決して今だけを考へて生きれば、後は何も考へなくてもいいと言うような「無の思想」とは別物である。こ

れらはいずれにせよ、現代日本人の時計によって計られる機械的な時間感覚とは、かなり違っているものだといえよう。

しかし、時間論からいえば、このような「中今」の時間論の方が、相対性理論からいっても、また量子力学的な時間認識に近いものがある。まず、相対性理論から言えば、我々は自分のいる場所の速度によって、時間の速さも変わるのであるから、絶対的な時間というものではなく、それぞれの場がそれぞれの時間軸の原点になっているのである。従って、世界は総て同じ速さ同じ時間で動いているのではないのであり、「それぞれの場の現在」の速度が時間軸となる。このような捉え方は、絶対的な時間として捉えず、それぞれの「現在」が時間軸の原点となる、中今の思想のような捉え方だということができよう。また、量子力学的には「非局在的な量子」という現象、すなわち現在の量子の状態が光速をはるかに超える瞬時に他の場所の量子の在り方を決定するという意味で、量子の世界が従来のような一方向に流れる時間という捉え方を超えた世界である事実がわかってきている。このことは現在の在り方が、時間軸の中での最も重要であり基軸になるものと捉えることもできよう。

このことから、価値論的に過去・現在・未来という時間をいかに見るかを考えれば、現在の在り方が、過去を活かすも殺すも、また肯定的なものとするか否定的なものとするかも決めるのであり、また未来も今の我々の生き方・在り方が未来を如何なるものとするのかを決めるのである。この価値論が量子力学から見い出せる一方で、「中今」の時間論も、この価値論の中に見出されたものであった。このように同じ価値論を見出すことが神道思想と量子論に言えることから、我々は両者の近似性を見出すことができる。

#### 4. 「中心分派の空間」と量子力学

次に空間についても、リーマン空間が日本の空間認識とちょうど重なるという指摘をしている。

日本の思想に於いては、空間は中心点の拡大したるものであるから、当然球面で

なければならぬ。而して拡大は御稜威のことであつて、御稜威は靈出づの義で、靈魂は発顕と還元との法則に従ひ、中心より発顕して又中心に還元し、此の発顕と還元との道程を空間と称し、時間と称するのである。近世物理学の宇宙観は、此の靈魂観の原理に限りなく接近し、宇宙の眞の姿はリーマンの空間であると云つて居る。リーマン空間とは球面の空間である。而して此の空間に於いては、一直線は原点より出発して先へ進めは進む程、結局元の出発点に帰着する。即ち発顕、還元の法別に従ふ意である。光線は此直線に外ならぬのであつて、其の行程が時間となり、空間となるのである。光は「靈翔る」である。靈の発顕、還元の作用が時間となり、空間となるのである。古代日本人の大思想は、現代の第一線の科学が漸く接近することの出来た大真理である。深く之を研究すれば研究するほど、何人も驚嘆するの外はないのである。（『全集三』 p 396）

リーマン幾何学では、曲率がそれぞれ正、0、負の一定値をとる空間（それぞれ球面、フラット空間[ユークリッド空間]、双曲空間）が成立するが、理論的には球面的であることによって、宇宙は無限性を有することになる。現代の宇宙論では、宇宙は今も拡大しており、基本的にはこの球面的なものとして把握される。

一方でラズロによれば、宇宙内における時空は時空を歪める物質的な影響がない空間では曲率ゼロのフラットであることが、近年判明した（1998年 ブーメラン・プロジェクト、2003年ウィルキンソン・マイクロ波異方性探査装置 観測結果等）。これは、物質密度が宇宙の膨張・収縮を決める臨界密度に正確に同じという意味であり、すなわち宇宙は膨張力と収縮力が拮抗する微妙なバランスの上で、時空をフラットに保ちながら永遠に存続するであろうことを示している<sup>\*12</sup>。実は宇宙は膨張しているはずなのだが、この時空の歪みをつくらないという点で、膨張に伴い重力（または物質質量）が増大している（もしこれが成り立たないなら宇宙は膨張していないかのどちらか）という、従来の理論を超えた領域に最新の宇宙論は入りつつあるのである<sup>\*13</sup>。

\*12 『叡智の海・宇宙』アーヴィン・ラズロ p 73-4

\*13 『叡智の海・宇宙』 p 80

今確実に言えることは、もしもビックバンで生み出された物質が実際よりも10億分の1だけ多かったら、時空は常に風船のように正に湾曲したものとなり、また逆に10億分の1だけ少なければ馬の鞍のように負に湾曲していたのであり、フラットな時空の成立できる状況とは、10億分の1の量で変わってしまうということである。つまり、我々の宇宙は驚くほど厳密に微調整されたものとして存在している世界なのである。ちなみに、極めて微細なまでの調整が成立していると言わざるを得ないパラメーターは30項目にも及ぶという。<sup>\*14</sup>これがインフレーション理論から導かれる多宇宙<sup>\*15</sup>の中で、単純な確率的問題として成立できた極めて珍しいケースとして捉えるべきなのか、宇宙論者たちの間でも決して一致は見えていない。それを考えれば、天之御中主神の霊(ひ)が発顕(膨張)作用・還元(収縮)作用という釣り合った2つの作用がある中で、同根一体に造られる宇宙という思想は、古代日本に基づきながらも決して荒唐無稽ではない、宇宙の実相に近似したものと言えるのではないか。



なお、ラズロによれば「散逸構造」理論でノーベル化学賞を受賞した、複雑系研究者として有名なイリヤ・プリゴジン<sup>\*16</sup>( Ilya Prigogine, 1917 - 2003 )の研究を紹介し、「ゆらぎによって不安定になった系が平衡状態<sup>Ilya Prigogine</sup>には落ち着かず、系内の力を再編成して、環境中に存在する自由エネルギーを取り込み、処理し、保存するように変化することがあるのだ。そうなると、系は崩壊するどころか、よりいっそう動的で複雑な状態になる。」<sup>\*17</sup>ことにより、エントロピーの増大とは逆の現象が成立し、生物などがこの世界に誕生できるとする。そしてこの原理から言えば、宇宙には「多様性を生む動的過程」と「収斂を起こす動的過程」の2つがなければならぬとラズロは指摘する。

---

\*14 『叡智の海・宇宙』 p 82

\*15 『宇宙はわれわれの宇宙だけではなかった』 佐藤勝彦 PHP研究所 2008年 p 48

\*16 写真 [http://www.ouviroevento.pro.br/leiturasuggeridas/Ilya\\_Prigogine.htm](http://www.ouviroevento.pro.br/leiturasuggeridas/Ilya_Prigogine.htm)

\*17 『創造するコスモス』 p 196

進化する系が一般に時間経過とともに多様化する運命にあるのなら、私たちの周囲には高度に分化した系がまともにもなく散在しているはずであり、宇宙の構造や諸定数、物理学や化学の世界のさまざまなプロセスが見せる驚くほど一貫性のある秩序など存在しないはずだ——生物学や生態学で明らかにされた、ほとんど奇跡とも思えるほど調和のとれた系については言うまでもない。もし理論が事実にふさわしいものであるのなら、多様性を生む動的過程の他に、収斂を起こす動的過程についても説明しなくてはならないはずだ。

『創造するコスモス』 p197

この指摘や、プリゴジンの見出した秩序の成立は、今泉のいう「発頭(膨張)作用・還元(収縮)作用という釣り合った2つの作用」とまったく同じ内容であり、世界にはまさしくこのような作用が確かに働いているのが真実なのだと思う。

## 5. 物質の波動と粒子的性格について

量子論が成立した20世紀前半に発見された量子力学上の一番大きな特徴が、量子的世界においてはあらゆるものが粒子的性質と波動的性質を持つこと、この2つを同時に測定することができない点であったが、今泉はこれを次のように説明する。

まず粒子的性質については、以下の通りである。(番号は齋藤)

- ① さて、天御中主神の御霊は既に述べた如く、発頭と還元によつて活動する。その発頭の働きを御稜威と云ふのであつて、御稜威は靈出づの義である。此の発頭したる靈は、極小極微の靈子となり、千万億兆、無量無限の靈子が分散態に於いて存在し、これが物質となり、精神となり、万有を組成するのである。而して個々の靈子は、何れも皆同性同質のもので、それ自身が一体をなし、単一にして不可分のものである。之を生魂と云ふのである。此の生魂は現象世界の根本要素で、之を科学的に云へば、エネルギー粒子である。(中略)
- ② 生魂は右に述べた如く、それ自身に一体をなす単一不可分の粒子で、それ以上細分することの出来ないものである。此の粒子の集合が宇宙万有である。近世物理学は、実験と理論とのあらゆる方法を以て、此の生魂の性質を究明し、之にエネルギー粒子、作用量子、光量子等の名称を附して居る。これが即ち量子論である。而してその帰着点は、宇宙万有の根原が、それ自身生成発展の単位として、一体をなす単一不可分の、微粒子であると云ふ思想に到達したのであつて、これは要するに我が民族の靈魂觀に限りなく接近し、生魂の性質を論証するものに外ならぬのである。(『全集三』 p 400)
- ③ 生魂は粒子の性質を代表するもので、生成発展を現し、足魂は粒子集合を代表する

もので、充実具足を現し、玉留魂は集合の中心と全体との関係を代表するもので、統一主宰を現す。生成発展と、充実具足と、統一主宰と、これ実に宇宙万有を一貫する三魂の法則である。更に此の法則を詳述すれば、中心根本たる天御中主神の分霊分魂が生魂である。生魂は霊出づ、即ち発顕の作用によつて生じたる霊の粒子である。『全集三』 p 402)

「魂」とは粒子的性質を形状から表した言葉であり、科学的な言い方ではエネルギー粒子である。この物質的にも大元である生魂から足魂へ、そして玉溜魂へと発展してく粒子的性質が万有に確認できる「三魂の法則」なのだという。一方で、波動的性質については次のように述べる。

此の波動的性質は高皇産霊、神皇産霊と称せられる。高皇産霊は発顕の霊力を意味するもので、神皇産霊は還元の霊力を意味するものである。中心の霊力が発顕して、分派末梢に展開する作用が高皇産霊で、分派末梢が中心へ還元し、収斂する作用が神皇産霊である。而して此の二つの作用は、例へば交流の周波の如く、交互に来るのが常であるから、宇宙万有は波動的性質を有するのであつて、波動の断面が粒子的性質になるのである。『全集三』 p 401)

波動性とは、今泉が言うところの発顕作用と還元作用によって、中心とそこから生まれた分派を結びつけている力のことであり、この発顕・還元の両作用の働きをもって今泉は「産霊(むすび)」と呼ぶ。そして波動の断面が粒子的性質を見せるのだという。

2つの作用は交流の周波のごとく、交互に来るのが常というのは、今のところ科学的に検証されたわけではないが、波動性はこの2つの発顕・還元作用の現れだということに関しては、前述のとおり時空がフラットな空間として成立しているという事実からも、宇宙には膨張と収縮の両方の力が確かに均衡して働いているという点で、日本思想と量子力学は相当に近似した理解に立っているといえる。

以上の2つの性質を踏まえ、今泉は粒子性と波動性を両面持したものを二霊三魂説に基づき、「波動性と粒子性は表裏一体である」と説明する。



而して波動の世界と粒子の世界とは、表裏一体をなすものである。此の関係を更に詳述しよう。

科学的に論ずれば、二霊の波動世界は微積分の行はれる連続集合の世界であり、三魂の粒子世界は代数計算の行はれる可附番集合の世界である。霊の連続的波動は、魂の粒子的集合となつて現れる。之を足魂といふのである。霊の連続運動は、常にその収斂すべき極限がある。魂の粒子世界に於いては、此の極限は中心となつて現れる。故に外見は単なる中心であるが、その本質は極限值或は集積点であるから、収斂と展開との原点として、発顕と還元との本源として、中心たると同時に全体たる性質を有する。之を玉留魂といふのである。

生魂は粒子の性質を代表するもので、生成発展を現し、足魂は粒子集合を代表するもので、充実具足を現し、玉留魂は集合の中心と全体との関係を代表するもので、統一主宰を現す。生成発展と、充実具足と、統一主宰と、これ実に宇宙万有を一貫する三魂の法則である。更に此の法則を詳述すれば、中心根本たる天御中主神の分霊分魂が生魂である。生魂は霊出づ、即ち発顕の作用によつて生じたる霊の粒子である。此の発顕の作用が、即ち高皇産霊である。

而して此の作用は恰も遠心力の如く、次第に中心より遠ざかつて分散する方向に働くのである。然るにこれと共に、恰も求心力の如く、中心に近づけ、収斂する方向に働く還元の霊力がある。これが即ち神皇産霊である。此の作用あるがために、多くの生魂は同気相呼び、同魂相求め、一つの中心に収斂する集団を造る。之を集団として見れば足魂である。之を中心に収斂する全体として見れば玉留魂である。一切の物質的存在、一切の精神的現象は、此の三魂の顕現に外ならぬのであつて、その詳細は多くの实例に就いて次第に説述されるであらう。

以上によつて明かなる如く、三魂の法則は、発顕と還元との二霊の法則と表裏一体をなすものである。中心根本より発顕したる分派末梢は、又中心根本に還元する。此の発顕と還元との間断なき反復によつて、中心と分派とは一に帰する。これ中心分派帰一一体の原理を生ずる所以である。『全集三』 p402)

波動の世界と粒子の世界は、微積分の連続集合の世界と、代数計算の世界という性質が異なる2世界にある。両者は裏表であつて、どちらかが見えるときはもう一方は隠れて見えない。

しかし、前述のとおり今泉は「波動の断面が粒子的性質」を見せるという。そうであるならば、波動の断面がつくられることがなければ、それ以外は波動的性質にあるということになる。つまり量子的世界において、基本は波動的性質であつて粒子的性質ではないということになる。

まずは今泉の説明に従えばそうなるのだが、実のところ2004年に報告された米国の物理学者シャーリアー・アフシャー (Shahriar Afshar<sup>\*18</sup> ar 1971-) の実験によって、粒子性が観測されているときでも波動性



Shahriar Afshar

が見られることが確認された。このことから、素粒子物理学者たちは粒子の基本的な性質は波動性であって、粒子性ではないということを支持する方向に傾いているという。結論から言えば、今泉の説明と同じ結論ということであり、これも今泉が生きていた時代の量子力学の標準であったボーアの解釈 (粒子性と波動性は相補的であり同時に観測されることはない) を超えて、最も最新の結果と合致しているという点は大変興味深い。

## 6. 「エーテル空間」と量子真空の視点

ここで、かつて今泉の頃までは残っていてもその後否定された物理的な仮説についての言及がある。それがエーテルである。エーテル (aether, ether, luminiferous aether) は、主に19世紀までの物理学で、光が伝播するために必要だと思われた媒質を表す術語であった。だが、19世紀後半からマイケルソン・モーリーの実験を始めとする、エーテルの性質を明らかにする試みが為されたが、それらは失敗に終わった。それに対して、特殊相対性理論はエーテルの存在を仮定することなく実験結果を説明することができたことから、エーテルは物理学の理論から除外されることになった。今泉もそのことは知っていたと思うが、それでも今泉がエーテルを前提としながら下記のように相対性理論の示す時間概念について説明する点は、まだ不明である。

第一に考ふべきは、運動或は静止と云ふ観念が、全く相対的のものであると云ふことである。Aが静止し、Bが之に対し、或る速度で運動して居ると云ふ場合には、反対にBが静止し、Aが之に対し、或る速度で運動して居ると考へることが出来る。斯くの如き相対的運動以外に、絶対の静止、或は絶対の運動なるものは、只に認識し得ないのみならず、全く無意味なものである。而して此の理を推し進めると、或る坐標系がエーテル

\*18 写真 <http://www.graveline.com/pastshows/062510.html>

に対して静止して居るか、又は等速運動をして居るかは、全く決定し得ないこととなる。或る観測者の坐標系に於いて、二つの事件を連ねる時間は、通常光によつて認識されるのであるが、エーテルに対して、静止して居る坐標系に於けると、之に対して等速併進運動をして居る坐標系に於けるとで、光の進行状態が異なる筈である。従つて前の坐標系に於けると、後の坐標系に於けるとで、時間の判断を異にし、長短の差を生ずることとなる。然るに両坐標系の何れが、エーテルに対して、静止して居るかを決定することは出来ないのであるから、前者に於いて用ふる時間と、後者に於いて用ふる時間とは、同等の権利を以て真の時間であると主張することが出来る。(『全集三』 p 391)

前述のとおり、エーテルは廃れた物理学理論の一部であると考えられているが、ラズロによれば、この20年くらいの間発見により、エーテルとは呼ばないが宇宙の真空は決して相対性理論以降に考えられてきたような空っぽな存在ではなく、中身が非常に濃い状態の「量子真空」なのだとなつてきた。同じような意味で、今泉はエーテル空間について次のように説明する。

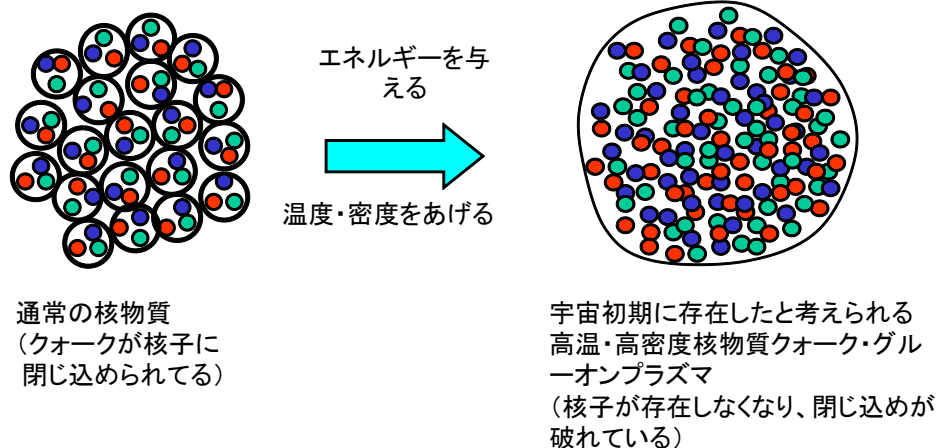
而して此の三魂法の粒子的体系は、二霊の波動的法則と不可分のものである。全太陽系の存在する時間空間は、太陽系そのものと不可分一体である。光や引力や電磁波の通過すると考へられるエーテル空間は、発頭の髙皇産霊と還元の神皇産霊との二霊の顕現する所であつて、三魂の粒子的存在たる太陽系そのものと不可分一体なのである。故に殊更に引力などと云ふ仮定を設くる必要はない。時間空間そのものが霊であつて、発頭の霊力と還元の霊力との構成であるから、これが粒子世界に顕現するときには、体系も軌道も時間空間そのもの、性質の中に定まつて居るのである。近世の相対性理論は、この点を究明して、引力は四次元のリーマン空間そのもの、性質であると主張するに至つた。靈魂観の一例証と看做すべきであらう。(『全集三』 p 404)

「時間空間そのものが霊であつて、発頭の霊力と還元の霊力との構成」されているのであるから、時間空間(エーテル)自体が量子力学的力を有する場なのであり、素粒子はその影響を受けてどのように動くかが定まるという説明である。かつてエーテルと呼ばれた空間は今日、量子真空と呼ばれる。この量子真空の状態がわかつたのが、2000年からアメリカで行われた超相対論的重イオン加速器を使った実験に

よってであった。次の図<sup>\*19</sup>のようなクォークを取り出すため、加速した粒子の衝突によって超高温（太陽表面温度の3億倍）状態を作り出した結果、クォークは解放はされたが、バラバラに運動はせず、集団的なままであった。この実験から分かったことは、真空とは何もない状態というより、大変に密度が高い状態になっているのであり、かつ液体のように超流動性も有するということであった。<sup>\*20</sup>そして量子真空の中にある粒子に対して、ある種の一貫性のある動きをもたらしているものは、その真空そのものという理解に、今の量子物理学の世界はなっている。この点でも時間空間が発頭力と還元力で構成されている場であり、この2つの作用が常に均衡しつつ働いている場なのだという今泉の説明は、量子真空の説明に至極近似している。

ラズロにおいては、さらにこのようなエネルギーに満ちた量子真空というだけでなく、「情報」に満ちた空間という認識にまで進んでおり、彼はこれと同じ宇宙観を持っ

ていた古代インド哲学の「アーカーシャ年代記」にちなんで、「アーカーシャ・フィールド（Aフィールド）」と呼ぶ。<sup>\*21</sup>これも大変興味深い説明となっている。



## 第8章 今泉の科学的説明Ⅱ：精神・生命について

### 1. フラクタル構造としての二霊三魂の法則

宇宙万有は、高皇産霊、神皇産霊の二霊と、生魂、足魂、玉留魂の三魂との顕現であ

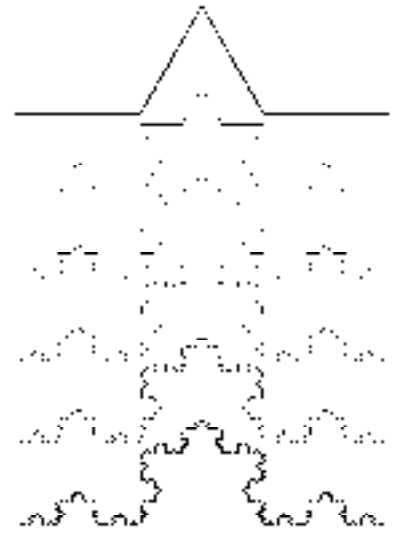
\*19 [www.phenix.bnl.gov/WWW/publish/akiba/PR/PRbook.ppt](http://www.phenix.bnl.gov/WWW/publish/akiba/PR/PRbook.ppt)「宇宙初期の高温高密度状態の再現とその性質の研究」より

\*20 『叡知の海・宇宙』p63

\*21 『叡智の海・宇宙』p80

る。二霊の法則と三魂の法とは、全宇宙を支配すると共に、又全体の部分たる万有個々を支配する。何となれば宇宙は全体としても、又個々の万有としても、悉く靈魂の顕現であつて、二霊の法則と三魂の法則とは、靈魂それ自身の自性であるからである。万有を支配する法則は、その部分をも亦支配せねばならぬのである。(『全集三』 p403)

「霊の法則と三魂の法とは、全宇宙を支配すると共に、又全体の部分たる万有個々を支配する」ということは、全体を成り立たしめる法則は、部分においても宿る。つまり、あらゆる段階、あらゆる部分に宿るのである。極大なものから極小のものまで、また万有同根一体であるから物質から精神や生物においても、その他のものも同じ構造を持っている。これは言わば世界が全て二霊三魂の法則によって一貫したフラクタル構造<sup>\*22</sup>の世界になっているという意味である。この点でも、今泉の見出した世界は、現代科学としっかり重なっている。そこで、次はこの視点から、今泉が有機物と精神と物質が同根性(同じ構造)を持つことを、どのように語っているかを見ていきたい。



フラクタル構造図

## 2. 量子的世界に属する生命の在り方

今まで物理学的世界を中心に、二霊三魂の法則により、宇宙は万有同根一体のあり方になっていることを見てきた。そして今度はその中でも、より有機的な生命の世界に対して今泉がどのように論じているかを見ていきたい。下記は今泉の生物世界に対する記述である。

植物でも動物でも、一切の生物体は、細胞によつて組成せられて居ると云ふことは、顕微鏡の発明後、間もなく発見せられた事であるが、総べての生物体が斯くの如く細胞なる単位粒子に還元せられ、細胞はそれ自身で一個体をなし、それ以上の細分を許さないものであると云ふことは、一切の物質が電子、陽粒子等の単位粒子に還元せられ、此

\*22 図 <http://banana.cite.tohoku.ac.jp/topics/fractals/fractal/fig1-1.gif> より

の単位粒子は、それ自身が一つの素量であつて、それ以上の細分を許さないと云ふことと様に、三魂の法則の基礎を実証するものである。一つの細胞は、それ自身が一個体をなす生命の単位粒子であつて、生魂である。バクテリア、原生動物の如き、単細胞生物では、一つの細胞が一つの生物体であるが、その外の多くの動植物では、多数の細胞が集団を造つて足魂を顕現する。而してその集団には、中心分派の原理が如実に働くのである。例へば高等植物に於いては、根幹と枝葉との体制整然として、中心分派根本末梢、帰一一体の原理を表現し、高等動物に於いても駆幹、四肢、諸内臓等の分派が中心たる脳髓によつて主宰せられ、一切の活動は神経系統によつて、中心より発顕して、又中心に還元し、個体の各部分とその活動とは、完全に統一せられて居る。これ即ち玉留魂である。(『全集』P405-6)

生物はこのように、細胞(生魂)→ 一個体(足魂)→ 中心を持つ高度体(玉留魂)の三魂の法則通りに出来ており、また中心からの発顕と中心への還元によって、「個体の各部分とその活動とは、完全に統一せられている」ことは、二霊の法則の証にして、中心分派の原理の現れだとみる。

一見機械的な当てはめをしているかにも見えるが、ラズロが紹介しているとおりの現代の生物学は、身体内で全身の離れた各部分が瞬時に反応して調和をもたらしていることで、初めて生命は生きていられるのだという身体反応の事実に、量子力学的なものを見出しているのである。

<p>身体の驚異的な一貫性</p> <p><u>ダイナミックな平衡状態が実現するためには、生命体全体を通して、長距離ではば瞬時に起こる結びつきが成り立っていなければならない。このような結びつきの広がり、それが生命体のなかを伝わる速度は、これまで科学者たちが考えていた水準をはるかに超えている。たとえば人間の身体は、約1000兆個の細胞からできているが、これは銀河系を構成する恒星の数よりはるかに多い。この細胞のうち、毎日6000億個が死に、同じ数の細胞が新たに生み出されている。平均的な皮膚細胞の寿命は約二週間で、骨細胞は3カ月ごとに生まれ代わる。90秒ごとに数百万個の抗体が合成されるが、それぞれの抗体は約1200個のアミノ酸できている。また、一時間ごとに2億個の赤血球が再生産されている。米国オークリッジ国立研究所が行った放射性同位元素分析によれば、一年間で、生命体を構成する原子の98%が入れ替わるそうだ。心臓や脳の細胞は他の細胞よりも長生きするとはいえ、身体の内かに存在するもので不変なものなどない。それでも、あるとき共存しているものは、毎秒幾千にもものぼる化学反応を体内で起こすのであり、それらの反応のすべてが正確かつほぼ瞬時に調整されて、生命体全体のダイナミックな秩序を維持しているのである。</u></p> <p>(ラズロ『生ける宇宙』p11-12)</p>
--

我々の身体の驚異的な一貫性は、脳内も含め量子力学的なスピードで一斉に反応できる身体内活動が無ければ維持できない。この全身一体となった調和をもたらしているものは何かといえ、1つの変化の情報が生化学的なレベルを超えて、量子的反応ともいえる速度で一瞬の内に全身に伝わり、そして全身もそれに応じて最も適切な調和した反応をもたらすという、従来は知られなかった生体の全体的調和能力にある。英国の生物物理学者メイ・ワン・ホー (Mae-Wan Ho<sup>\*23</sup> 1941-) は、このことを生命体を構成している様々な部分は、いかに多様性が高かろうが、総ての演奏者が他のすべての演奏者の即興に対して即座に、しかも自然に反応する、一つのジャズバンドのように振る舞うと述べている。<sup>\*24</sup>これは、生体内の反応は1つの変化に対して約100億倍の反応が出てくるということであり、これを完全に瞬時に調和して行えるというのは、従来のような生体観ではない、量子的生体観が必要だということを示唆している。<sup>\*25</sup>この点でも、今泉のいう「個体の各部分とその活動とは、完全に統一せられている」部分の説明は完全に重なっている。



Mae-Wan Ho

### 3. 精神と物質の同根一体性

今泉は、万有同根帰一一体の哲学からの1つの必然的帰結、精神に関しても物質と同根一体の「霊(ひ)」によって生まれるものとし、精神現象についても量子力学レベルの世界に属するものだとすることを次のように説明する。

次に精神界に就いて、万有同根の原理を説かねばならぬ。精神とは何ぞやと云ふ問題は、哲学上、科学上の興味の一中心をなすものであるが、未だ定まつた学説なく、未解決の難問である。然しながら日本民族の靈魂観に於いては、その解決は決して難事ではない。一切の物質現象の根源が、又精神現象の根源なのである。これが為めに、宇宙万

\*23 写真 <http://www.vitalhealthbooks.com/author/189.html>

\*24 <http://www.i-sis.org.uk/quantumJazzBiology.php> 「The Institute of Science in society」  
Report 23/06/10

\*25 『生ける宇宙』 p 14

有同根一体であると云ふのである。之を科学的に云へば、同じ根本エネルギーが発顕して物質現象となり、又精神現象となるのである。現代科学の通説では、精神は脳神経細胞の活動であると称せられて居る。脳神経細胞その物が、精神でないことは明かで、その活動である。而して活動とは、化学変化の速度の運動を意味するのではない。脳神経細胞を構成する物質分子の本質たる電子運動の、波動力学的、量子力学的現象が精神の本質なのであらう。精神の速度が光の速度、或は電波の速度に類することは、何人も経験上承知する所である。これ精神現象が、前記の物質の態様の第一の段階、第二の段階に属せず、第三の段階に属するものなることの一つの証明である。(『全集三』 p390)

このように、精神現象も一種の量子力学的なレベルの現象として捉える視点は、ラズロも紹介しているが、現代の最先端の研究によって見えてきた部分である。(番号は齋藤)

- ①脳の細胞 — いわゆるニューロン — は、それ自体が分子、原子、そしてエネルギーの束である素粒子の束であり、素粒子に拘束されたエネルギーの出处は、宇宙全体に広がっている複雑な波動-場なのだ。(中略)フリーマン・ダイソンのような傑出した物理学者や、アルフレッド・ノース・ホワイトヘッドのような優れた哲学者たちが、基本粒子さえも、何らかの形の意識を何らかの水準で与えられていると主張してきた。
- ②宇宙は、最終的には、純粋に物理的なものでも、純粋に精神的なものでもないと考えなければならない。宇宙は、精神的側面と物理的側面の両方を基本的に等しく与えられた、精神物理的なものと見るのが最も妥当である。
- ③人間の意識は、量子真空 — 精神物理的な宇宙の包括的リアリティの基本要素である超流動体の普遍的なフィールド — から出現し、そこに根差した意識が高水準の形で現れたものなのである。 『生ける宇宙』①p80-1 ②p91 ③p138

ちなみに、今泉はこれを詳しく次のように書いている。(番号は齋藤)

\*26 フリーマン・ダイソン (Freeman John Dyson, 1923年 - )は、イギリスクローズン生まれのアメリカ合衆国の理論物理学者、宇宙物理学者。ケンブリッジ大学卒業、コーネル大学大学院卒業。プリンストン高等研究所名誉教授。若くしてダイソン方程式を発表、量子力学に大きな寄与をなした。



\*27 アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド (Alfred North Whitehead, 1861年 - 1947年)は、イギリス人の数学者、哲学者。論理学、科学哲学、数学、高等教育論、宗教哲学などに功績を残す。ケンブリッジ大学、ハーバード大学の各大学において、教鞭をとる





- ①脳細胞は例へば巧妙なる発電機の如きものであつて、絶大無限の速力を以て客観界を模写し、之を分析、総合し、生成発展せしめることが、感覺、感情、推理、思想等となつて現れるのである。而してその発展の様子は、物質界の発展の様と、全く同様である。これ精神と物質とが、同根一体なることの一つの証明である。
- ②斯くの如く、物質と精神とは、同根一体であつて、等しくエネルギーの発顕したるものである。唯エネルギー括動の速度及び態様によつて、或は物質となり、或は精神となる。宇宙の精神は光である、電気である。之を構成するものは光量子である、作用量子であるとも云へるであらう。その同じ光量子、作用量子の働きによつて、人間の精神が出来るのである。故に人間の精神は、宇宙の精神と同根一体あることはいふまでもあるまい。
- ③唯物論者等は、此の最高真理が解つて居ないから、途方もない間違を云ふのである。彼等が物質と称するのは、エネルギーの第一階、第二階の態様で、速度が極めて緩慢で、質量の多い鈍重な状態を云ふのである。
- ④而して此の物質が根源で、精神はその上層現象であると云ふ至つては、全く本末転倒である。斯かる鈍重なる特殊状態、即ち物質と称せられるものの根源は、エネルギーの第三階の態様、即ち波動力学的、量子力学的現象である。これは物質と云ふよりも寧ろ精神である。精神が根本で、物質が末梢なのである。唯物論は此の根本的誤謬の爲めに、多くの錯倒を以て終るのである。(『全集三』 p 390)

脳細胞の物理的働きと、そこで生じる量子力学的な情報伝達のレベルの違いを指摘している点は、実に注目に値する。「同じ光量子、作用量子の働き」によって、人間の精神はできているとする今泉の説明は、非常に物理学的な説明である。

つまり、物質的なものの最深層(エネルギー界)の態様である波動力学的・量子力学的現象とは、精神の属する領域の現象として語れるのである。量子力学的に見た場合の物質とは、精神的なものが備える性質・特徴から説明した方が合致し説明しやすいのである。そのように見た時、物質は第三相段階(最深層)では精神的規定が合致しており、実は精神的なものが根本で、物質的なものが末梢だったのだという把握ができる。

この視点はラズロが最新作で展開している主張に近く、自分にとってはこの合致が今回の2人の思想を比較する起点となっている。

#### 4. 万物生命論と万物精神論

前述①②③を敷衍すれば、今泉の「生体の根本現象＝精神的現象＝量子力学的現象」という視点は、現代の物理学者や生命科学者の視点と重なるのであり、今泉の見出した日本思想は、広く量子力学的な認識と重なり合うのである。今泉の以上のような視点は、万物生命論及び万物精神論として一つの結論に至る。

微小なる原子も、巨大なる太陽系も、等しく二霊三魂の法則に従ふのであるから、その中間の物質的諸現象が、之に従ふことは勿論であるが、此等の中で特に細説する必要があるのは有機物である。

有機物は生命の宿る所であると考へられて居る。然しながら生命の宿る所は、有機物ばかりではない。一切の無機物にも、時間空間そのものにも、皆生命が宿つて居るのである。何となれば、此等は悉く靈魂の発顕する態様であり、靈魂即生命であるからである。有機物も亦素より二霊三魂によつて出来て居るのである。二霊三魂が即ち生命と呼ばれるものなのである。(『全集三』 p 405)

万物に生命が宿るという結論は、万有同根一体の論理から出てくる論理的結論である。同様に万物が精神を有するという視点もこの帰結である。

斯かる同根一体の万有は、産靈の活動によつて生成し、発展するのである。高皇産靈、神皇産靈は中心より発顕して分派となり、分派より還元して中心に帰する波動的靈力である。これが即ち光であり、精神である。宇宙万有は此の二霊によつて出来たのであるから、悉く精神がある。人間や高等動物だけに精神があると思ふのは、非常な誤りである。此の二霊の活動は、生魂、足魂、玉留魂の三魂の顕現と、表裏一体の関係にある。三魂は粒子的存在であつて、質あり、量あり、実体がある。これが発展して原子となり、細胞となり、個体となり、社会となり、宇宙万有となる。その組織は常に中心と分派、根本と末梢との体制を有し、小は原子、細胞より、大は天体地球の構成に至るまで、簡單なる原生界より、複雑なる人間社会に至るまで、宇宙万有を一貫する三魂の法則となる。(『全集三』 p 416)

万物に生命があるなら、それによつて世界は「生み一生まれる関係」の世界(生成の世界)となり、また万物に精神があるなら、人間同士に限定されない極めて広い精神的交流にこそ、精神世界の本筋がある。今泉の論理に従えばそういうことが言える。それは従来の機械論的世界観からの転換であり、生命的世界観の中にこそ我々の今後の思想は築かれるべきなのだということになるだろう。

このような思想的転換が起こったとき、それによって我々の世界に何が起こるのか。今泉も、そこに至っての説明は何れのところでも行っていない。ただし、総てに生命が宿り総てに精神が宿るなら、我々人間の世界に対する認識が変わり、そして行動が変わることは確かである。その変わった先の世界こそ、我々の日本の目指す世界があるのだというのが、今泉の本当の意味での最終的思想の目標だったように思う。少なくとも、こうした世界観に立った思想あるいは行動は、世界に破壊をもたらすというよりも、生命尊重の立場にたったより高い精神の世界の形成につながるのではないか。本来の神道とは、そういうものであり、破壊よりも調和、分断よりも一体、他人意識よりも家族意識、権力的関係より親子的関係、そうした特質を備えたものだとえる。

この点、ラズロは最新の幅広い科学の成果を紹介し、今泉の指摘と同様に宇宙すべてに一貫性をもたらしていると思われ量子力学的現象が、実に幅広く共通の現象としてみられることを証明している。例えば生物の進化には、従来の進化論におけるランダムな偶然性の積み重ねという、淘汰の歴史では説明できない整合性があり、生物の環境に対する適応的变化も、量子力学的な全体的変化をすることを紹介する。そして生物または生命の深層は、環境に適合して同一性を目指す、量子力学的な存在であると指摘している<sup>\*28</sup>。さらに、トランス・パーソナル心理学からも、他者との精神的交流における量子力学的なレベルのもの、例えば変性意識状態におけるテレパシーのような交流や一卵性双生児同士の空間を超えた伝播の事例を挙げ、人間の意識の中にも量子力学的な作用があることを指摘する<sup>\*29</sup>。この意識の量子力学的作用は、脳科学の知見として「**神経生物学的な脳研究の最先端で、真の科学的な説明が出現しつつある。その鍵の成るのは、脳は生化学的な機械ではないという洞**

---

\*28 『叡智の海・宇宙』p 111 又は Sir Fred Hoyle : "The chances that life just occurred on earth are about as unlikely as a typhoon blowing through a junkyard and constructing a Boeing 747." [http://nanuq-alaska.net/Troop215/not\\_a\\_chance/not\\_a\\_chance.asp.htm](http://nanuq-alaska.net/Troop215/not_a_chance/not_a_chance.asp.htm)

\*29 『叡智の海・宇宙』p 135

察である。脳は、あるいは、生命体の全体は、[巨視的な量子系]なのである。<sup>\*30</sup>  
と紹介し、この見方を補強している。

ちなみにこの指摘は、今泉による前述の「脳細胞は例へば巧妙なる発電機の如きもの」「脳神経細胞を構成する物質分子の本質たる電子運動の、波動力学的、量子力学的現象が精神の本質なのであらう」という指摘と、まったくと言っていいくらい同じ認識に立っていると思われる。

以上を考えれば、ラズロのしている世界観は、非常に科学的であるのと同時に、今泉的世界観とほとんど同じとっていいくらい似ている。これは今泉の思想が、今日でも十分な有効性があることの証拠と言えるのではなかろうか。少なくとも、アーヴィン・ラズロの世界観が否定されるのでなければ、今泉の見出した世界観、及び今泉が量子力学的な日本思想の説明を一概に間違いだと指摘することは無理があると思われる。疑似科学的なものなら、牽強付会という指摘もなされようが、そのような無理な説明は両者とも行っているようには思えない。もちろん、未だ総てが完全に証明されたわけではないが、現状としては十分我々の思想的根拠と扱うだけの価値があることは認めてよいと結論づけられるだろう。

## 第9章 宇宙観・生物観から一貫性をもった国家・社会関係の認識へ

### 1. 今泉とラズロの異なる点


これまで見てきた今泉による科学的な生成論の説明は、その量子力学的なものが一貫している点で、ラズロのやはり一貫した世界観の説明(最終的には「Aフィールド」に至る)によく重なるものがあるが、これが国家・社会に関する分析になると、今泉とラズロは、時代背景そして根拠の違いからかなり説明内容が異なるようになる。

そこで次に、両者が人間社会に対してどのような認識を持っているのかを見ていき

---

\*30 『叡智の海・宇宙』p 141

たい。まずラズロについて見ると、ラズロが創設者・会長として社会問題に対して発信する組織となっている「ブダペストクラブ、およびその使命」を見ると次のようになっている。

<p>©Welcome to the Club of Budapest International Foundation</p> <p>Founded in 1993, the global Club of Budapest is an informal international association <u>dedicated to developing a new way of thinking and a new ethics that will help resolve the social, political, economic, and ecological challenges of the 21st century.</u> With its roster of internationally renowned members the Club initiates a dialogue between different belief systems and world views in order to co-create and develop effective strategies for responsible and sustainable action with a global focus. <a href="http://www.clubofbudapest.org/">http://www.clubofbudapest.org/</a>より</p> <p>©The Mission of the Club of Budapest is to be a catalyst for the transformation to a sustainable world through</p> <ul style="list-style-type: none"><li>◦<u>Promoting the emergence of planetary consciousness</u></li><li>◦<u>Interconnecting generations and cultures</u></li><li>◦<u>Integrating spirituality, science, and the arts</u></li><li>◦<u>Fostering learning communities worldwide</u></li></ul> <p>The philosophy of the Club of Budapest is based on the realization that the enormous challenges that humanity is currently facing can only be overcome through the development of a global cultural consciousness. The view of the Club of Budapest is focused on a cultural consciousness with a global perspective. Like Greenpeace fights for ecological issues, UNICEF for children, and Amnesty International for human rights, the Club of Budapest stands for global consciousness. Its mission is to be a catalyst for the transformation to a sustainable world. The Club perceives itself as a builder of bridges between science and art, ethics and economy, between cognition and realization, between old and young, as well as between the different cultures of the world. One of the prime objectives of the work of the club is the initiative "You Can Change the World" <a href="http://www.clubofbudapest.org/mission.php">http://www.clubofbudapest.org/mission.php</a>より</p>	 <p>WorldShift Network THE CLUB OF BUDAPEST</p>
--	--

ブダペストクラブは、1993年に21世紀の社会・政治・経済、環境という課題の解決を助けるであろう新しい考え方や倫理を開発すること専門とした非公式の国際組織である。その使命は、「地球意識の発現の推進」「世代と文化の相互接続」「霊性、科学、芸術の統合」「全世界コミュニティの学習助成」の4つを通じて持続可能な世界を形成する架け橋になることであり、グリーンピース、ユニセフ、アムネスティインター

ナショナルなどと同じ世界認識の上に立っている団体だと言える。つまり全人類共通の問題という認識に立っている組織だといえよう。ラズロが立ち上げて会長になっていることから、ラズロ自身の人間社会に対する視点は、おおよそこの団体が描く範囲にあると考えられる。

実はラズロの論議には、国家という視点はほとんど出てこない。あくまで人類としてという視点で論ずるのであり、普遍的な問題解決案を人類社会に提案していくという姿勢が基本である。故に、国家を物事を考える基本においている今泉とは、どうしても国家社会の論じ方が異なってくるのである。

ラズロが基づくのは、あくまで科学的に見て世界の最も根本にある量子力学的世界と、これと共通する生物観や精神観から導かれる、この世界に一貫する普遍的な法則性である。ラズロにとって人間の生き方考え方も、その普遍的な真理に合致したものが求めるものなのである。そこから我々の行動の善悪の判断も、それが量子力学によって見出された宇宙のあり方にまで通ずる「一貫性」に沿ったものか否かで判断されるのである。

しかし、科学によって新たに魅力を与えられた宇宙に於いては、私たちは倫理性の客観的基盤をはっきりと見極めることができる。そのようなことが可能なのは、物事が今ある状態は、実際に、それらのものがどのような状態であるべきかを示唆しているからだ。物事は受動的で不活発なのではなく、自己進化し、共一進化しているのである。(中略) ある行動が善と呼ばれるべきか悪と呼ばれるべきかは、進化プロセスを強化する因子 — より正確に言えば、もしそれが欠けていたなら、進化プロセスが妨げられる因子 — を参照することによって判別することができる。その因子とは“一貫性”である。『生ける宇宙』p94-6)

ラズロは、個々人の意識のあり方から今日の社会の在り方へという方向で、人類規模の問題群を考える。この捉え方は、個人を基盤にしてその集合体として国家をとらえる、オーソドックスな西洋哲学の方向性に従った捉え方ということもできる。人類が抱える諸問題の解決は、この一貫性への気づきによって目覚めた個々人にこそ、その解決の基盤が求められるのである。

これに対して、今泉は徹底的に日本民族の思想に立脚する立場であり、個人の存

在から出発するのではなく、個人に先んじて共同体・日本国があると考える立場である。これは家族が先にある中で個人が生まれると考えるのと同じである。共同体としての国家の国柄を身につける中から、個人は確立されるのであり、「国体の精華」とは国体の滋養を身につけた、しっかりとした日本人が確立され、その優れた日本人によって国家が窮まりなく継承されてきたことを云う。この日本的な、人格を確立する中で継承される日本の思想こそは、家族的な世界として、弱肉強食的な世界を救済する力を有するのだという視点を持つ。そしてその中核にあるのが、神道思想なのである。

従ってもし最終目的として、今泉がブタペストクラブと同様の持続可能な世界を追求するにしても、その通る経路はもっと違ったものになると思われる。もちろん時代的な差が非常に大きいことから、単純に今泉が今日どう考えるか推測することは難しい。そこで少なくとも今泉生成論で説かれる

国家・社会論から論理的に導かれることは何か、それを次に探求してみたいと思う。

## 2. 国家社会とは : 三魂発展の第四段階説

まず今泉は、国家社会についても、三魂発展の法則の上に成立するものとして次のように説明する。

生物の特色は、細胞を以て生成発展の単位たる生魂となすことで、これは無生物が原子を以て生魂となすのに対応する。而してその発顕、還元的作用は無機界との間に行はれる。即ち無機界より発顕して、又無機界に還元するのである。これ有機界が副生界と称せられる所以である。斯くて我等は三魂発展法の三つの段階を知つた。即ち第一段は電子、作用量子、光量子等のエネルギー粒子を生魂となす発展であつて、これはエネルギー界と名づくべきである。第二段は原子を生魂となす発展であつて、所謂原生界である。而して第三段は細胞を生魂となす発展であつて、所謂副生界である。而して三魂の発展は之を以て終止せず、更に第四段の発展がある。それは細胞の集合統一体たる個体を生魂となす発展であつて、これが即ち国家社会である。(『全集三』 p409)

今泉の生成論の特徴は、宇宙から生物、さらには精神等のあり方まで総て一貫した

二霊三魂の法則で捉えると共に、さらに人間世界のことも、これと一貫して捉える点にある。生物における三魂(生魂<足魂<玉溜魂)の発展は、エネルギー界(量子レベル)から原生界(細胞レベル)へ、さらには副生界(個体レベル)へと段階が上がるにつれて、目に見える世界の形になる。そしてさらに人間世界においては、もう1つ大きな形をなす第4段階として、国家社会があるのだとする。ラズロも今泉がいうエネルギー界・原生界・副生界までは、同じような三段階の認識を示し、最終的には人体・精神・宇宙が一貫性を持つものとしてAフィールドを設定している。しかし、ラズロは今泉と違って人間の国家社会に一貫性を見出しているわけではないから、この点で両者は道を異にするのである。

では、今泉がどのように国家社会の内実を捉えているか、次に見てみたい。

<p>人類は之を細胞の集合統一体として見るときは玉留魂であるが、社会集団の生成発展の単位として見るときは<u>生魂</u>である。この生魂は同気相呼び、同額相求めて、足るが上にも足らんことを望み、満つるが上にも満つることを欲して集団を造り、<u>足魂を顕現する</u>。これが即ち社会である。而して此の足魂は当然に中心と分派との構成を有し、統一主宰の作用を伴ふのである。分派は中心より展開して又中心に収斂し、中心は中心たると同時に全体たる性質を持つ。即ち玉留魂たることが、宇宙必然の法則である。斯く<u>全体が統一せられることによつて、社会が国家になるのであるが、国家の中心が中心であると共に、全体であると云ふ為めには、平面的に中心であるのみならず、立体的に根本であり、中心根本と分派末梢とは、帰一体の関係にあるものでなければならぬ</u>。斯か<u>る中心が即ち我が天皇の御本質である</u>。故に天皇即国家、国家即天皇と申すので、中心即全体、全体即中心と云ふ宇宙根本原理の人生社会に顕現したるものに外ならぬのである。(『全集三』 p 409)</p>
---

今泉の二霊三魂の法則に則って人間社会を見ていくと、個々の人間が生魂であり、それが集団を形成し、家族に代表される団体社会が足魂、そしてその団体が中心分派の立体的構成を持つまでに中心が発展して成立した国家という玉溜魂(日本の場合は天皇)として説明をする。つまり、社会的動物たる人間のあり方の完成形態は、<中心>を有する国家であると見るのが、この段階での今泉の見解である。もしも人類がさらに進んで、国家が生魂となり、国際的・地域連邦が足魂、さらに世界連邦



が玉溜魂となる時代が来るのかも知れないが、今日においてもこの流れはほとんど現実的ではないので、今はこの方向への探求は保留とする。

此の宇宙自然の組織、活動、発展、其のままの原理原則が、人生社会に顕現したのが、我が皇国の国体である。即ち天皇は天津日の御延長、民は天皇の分身、国は皇家の延長である。故に、天皇即国家、国家即天皇、不二一体である。(『全集三』 p416)

上記に引き続き、今泉にとって天皇とは何か明らかになる。天皇とは、天之御中主神の御稜威が二霊三魂の法則通りに出来た、宇宙的法則通りに成立した自然国家・日本の中心であり、日本の玉溜魂とは天皇である。そして日本の古典にあるとおり、天皇は、高天原(宇宙)を統治することを任された天照大御神の子孫がシラスべき場所である豊葦原瑞穂国(日本)を、産霊の法則通りに生命を養い育てる中核であり、国家全体にその御稜威を発顕される存在である。また、国家全体はその中心(天皇)に向かってその在り方を収斂することから、国家全体が中心分派帰一一体となり、またそれが時間軸において子々孫々に受け継がれることから、根本末梢帰一一体となる。また、中心たる天皇と日本国民は大家と店子のような関係にあり、国家全体が家族的國家(家族主義)であり、家族的であるがゆえに西洋と異なって対立主義ではなく一体主義である。こうして中心たる天皇と国民は中心分派として帰一一体の関係、すなわち君民一体の関係となり、これが日本の国柄となるのである。

天皇の御本質は全國家、全國民生成化育の御本源にましますことである。天皇の大御心は宇宙万有を生成化育する産霊の大精神である。明治天皇が、「天下億兆、一人も其処を得ざる時は、皆朕が罪なれば、」云々と仰せられたのは、此の大精神の御発露に外ならぬのである。産霊の絶対理法を知らずして、日本国体を解することは出来ない。産霊の大精神を知らずして、天皇の大御心を察し奉ることは出来ない。外国思想の外に多くを知らない今日の学者、思想家等が日本国体を論じ、天皇の御本質を論じて、概ね誤解に陥り、謬論に墮するのは、深玄絶対なる産霊の原理を解しないからである。産霊の根本原理を解せずして、日本国体を論ずるのは、恰も数理を知らずして天文を論ずるが如く、生理解剖を知らずして医学を説くが如く、危険甚だしきものである。

(『全集三』 p416-7)

天皇即国家、国家即天皇とは、これまでの今泉の説明でいけば、天皇が担う生成発展の量子力学的作用の及ぶ国という意味であり、天皇は西洋の君主と違って自分の為祈ることもなく、自分の為何かを貪る存在でもない。あくまでも国家国民の生成発展を祈る存在であり、またいかなる状態かを知り、民とその思いを共有する「シラス原理」で動く存在である。

このように日本と西洋では国柄(国家成立の原理)が異なり、双方の内面的な概念規定も異なるがゆえに、西洋流の主権の奪い合いなどを当然の前提として見る人文社会科学の捉え方では、日本の国柄を適切に表現することが難しい。こうした点からも、今泉にとっては科学という色の付きづらい学問の援用が適切を思われたのかも知れない。

なお、今泉の上記のような認識で天皇を見ることは、日本人としては自国の国柄に基づいたものであり、学問的にもそれは肯定されてしかるべきである。問題は、他国のあり方についての見方である。次はそこを見ていきたい。

### 3. 日本と外国との違い

今泉が日本の立場から、諸外国をどのように見ていたのかは以下のとおりである。

<p><u>世界の多くの国家は、単なる人間の集合として、社会と云ふことは出来ても、正しき意味に於いては国家と云ふことの出来ないものである。真の国家はたゞ日本天皇国あるのみである。法を以て中心とし、徳を以て中心とし、或は武力、権力、財力等を以て中心としても、総べて人為の工作物で、対立分裂の所産に過ぎないものであるから、斯かる中心は常に動揺し、一つの中心は容易に他の中心によつて代へられる。これが即ち革命であつて、幾度革命を繰り返しても、分裂対立の連続で落ちつく処がない。所謂永久革命で、争闘と混乱との中に人類全体の疲弊衰亡を招く外はないのである。斯く中心と分派とが対立して居るから、君主国と民主国とは対立的な観念になる。此の両者が帰一一体になつて、宇宙の真理を実現するのが、天皇国なのである。全体を構成する各单位が中心より展開して、又中心に収斂すると云ふ性質を持たないから、各々勝手の方角に進まうとする。これが即ち個人主義であり、自由主義である。此等は要するに全体の分裂解体の外ならぬのである。(『全集三』 p 410-1)</u></p>
--

今泉によれば、三魂二霊の法則通りに出来て今なお存続している真正国家は日本だけである。他の国家は日本のような真正の中心を持たず、人工的に生み出したに過ぎない「法」「徳」「武力」「権力、財力」等をもって当てているゆえに、それらは本物の中心とは成り得ない。だから中心的地位の奪い合いが生じ、君主国と民主国のような主権争奪の対立的概念が標準となってしまう。個人主義も自由主義も、そうした背景から生まれた分裂解体の思想なのだとする。

さらに以下のように、日本では否定されるべき階級闘争史観も、本当の中心を持たずに分裂対立を繰り返してきた外国のあり方を見れば、当然に闘争の歴史として見えてくるからそうした国々にとっては正しい見方の一つだとする。

外国には斯かる完全なる中心がないから、法を以て中心とし、徳を以て中心とし、或は武力、権力、財力等の力を以て中心とする。一此等は皆人為の工作物である。宇宙自然の法則に従ふものではない。故にその中心は中心分派帰一一体にあらずして、中心分派對立争闘であり、根本末梢帰一一体にあらずして、根本末梢分裂混乱である。正確に云へば、中心にあらずして対立の一側面であり、分裂の一局部である。故に斯かる国々以外のことを知らない人々が、人間の歴史は階級闘争の歴史であるなどと云ふのは、強ち無理ではない。力を以て圧迫する一群と、圧迫される一群との対立を本質とする集団ならば、歴史は階級闘争の歴史に相違あるまい。斯かる国家は、正しき意味に於いて、国家と云ふことは出来ないので、三魂の霊力が未だ正当に発展せず、玉留魂が未だ完成しない過渡期にあるもの、或は生成発展の正路を逸脱して、退化の現象を呈するものである。恰もプラズモヂウムが未だ細胞を造らずして、多核の原形質塊をなし、多核細胞が多くを有するが如き例外であつて、エネルギー界、霊界には斯かる例外は殆ど無いが、事象が複雑になるに従つて副生界には多くの例外があり、更に複雑な国家社会に於いては、例外が原則より多い様な場合もある。然しながら、宇宙と共に永遠の存続発展性を有するものは、常に原則に準拠するものでなければならぬことは云ふ迄もない。(『全集三』 p410)

今泉の思想から言えば、日本の国柄は宇宙の真実をそのまま伝える国家であり、天皇はその宇宙根源の神の意志を継承する中心であり、そのような中核を持つ国家こそが真正国家なのである。そしてそうした中心を持たぬ国家は真正国家ではないがゆえに、世界に闘争をもたらす。その世界に闘争をもたらす国家が今は強大だか

らといって、それが正しい国家のあり方なのだとということにはならない。宇宙の真理から見れば、例外的な国家なのである。そのような国家群に対して、真正国家に生まれた平和な日本の思想を伝えることが我が国の使命というのが、今泉の結論なのである。

思うに、確かに今泉が見出した日本の思想が、これまで見てきたとおり量子力学的世界のありようにも合致し、そして宇宙の真理そのままに体现しているのだとすれば、それ自体は実に驚くべき一貫性の実現であり、誠に貴重な教えであろう。また我が国は、世界的にも稀な国家社会なのだとも言えるかも知れない。こうした視点は、自国と他国を比較して自国のアイデンティティを確立することを目的とする上では、有効な物事の見方だと思われる。しかし、現実的な副生界におけるこのような一個性（一国家）を標準に、他の同類のもの（他の国々）を序列化して見ることは決して正しい見方とは思えない。

実際、国家のあり方について日本のような国が真正なのだと言われても、他国の人々にとっては、仮にそれを言われて自国も同じようにしたいとは思ってもできることではないし、またやろうともしないであろう。それぞれの国家の成り立ちには、それぞれに負った歴史性があり、それを一挙に転換できるかのような科学的な革命的態度が、その国家にとって本当に正しいかはまた別物だからである。

前述の通り、ラズロのいう一貫性は、人類の民族性や歴史性を超えた一貫性であり、国家の成立という段階を超えて人類普遍の在り方を探求している。つまり、副生界以降の段階における相互の多様性を超えて、これを論じようとしている。これに対して、今泉は副生界に生じた国家の国柄を以てして、これに一貫性のレベルの差から区別を行い、日本だけを一貫した国として他国にはない無比の国家として位置づけ、他国はまったく一貫性の無い国家として説明する。

ラズロの思想が、一挙に人類というレベルに跳んでしまうことは、ある意味現代知識人の特徴でもあり、このことは実効性のある変革を考える上では決して有効ではない

場合も多い。それを考えれば、今泉のように副生界たる国家社会の段階をきちんと論じる事自体は、決して間違っているわけではないし、むしろ必要なことである。つまり、今泉の問題点はこの副生界の見方にあるのである。次にその問題点の中身を見ていきたい。

## 第10章 今泉思想の問題：副生界の扱い方について

### 1. 副生界の多様性の価値について

これまで今泉の思想を科学的説明に基づいて、今日の量子力学的世界観に通ずるものがあることを確認してきた。今泉の科学から見た生成論は、四段階ある人間世界の相(エネルギー界、原生界、副生界・国家社会)の中の最基底であるエネルギー界を中心に論じられており、その論議はラズロの論とも多く重なることがあることがわかった。しかし、現実を目にする世界である副生界等(特に国家社会)の論議は、ラズロとは大きく異なるものとなっている。

今泉はそこから、日本こそが唯一この真理に基づいた形を保った国であることを指摘し、他国との違いを強調する。そして日本こそが、最終的にその真理に基づいた皇道精神によって世界に調和をもたらし得る国であるという、日本国家の使命を語る。

ただ、その捉え方は、世界がどうしてこれほど多様なのか、それを説明するものになっていない。神道の「修理固成」の論理から言えば、副生界は多様に発展的分派が生じることこそが、本来の在り方だからである。そして現実に副生界たる世界には、例えば様々な形態の植物があり動物がいて、これら動植物群もその形態に応じた社会的関係(生態系)を持つが、それはそれぞれの環境との適合において生じたものである。地球上の生命はすべて自然な形で生じたものであるから、今泉もこれは自性の発揮として肯定するものである。一方で人間の国家社会においても、和辻哲郎がいうように風土の違いはそこに住む人間の国家社会の有様に、影響を与えないわけ

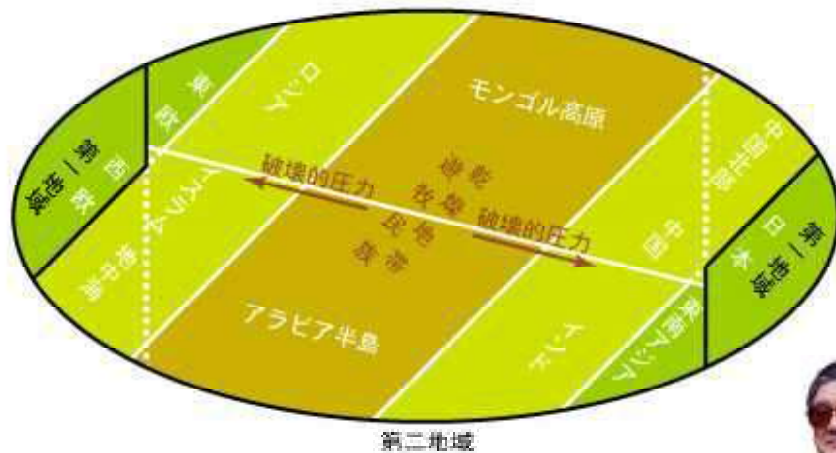
にはいかないのである。人間も自然的世界の住人として、他の生物同様に自然環境や社会的動物たる人間の二次的自然といえる、闘争的な国家社会同士の軋轢の影響も受ける存在だからである。

従って、国柄の違いが生ずるのは、まず自然環境によって影響を受け、さらにある意味自然に人間集団には強弱の違いがあり、強弱に伴う人間社会同士の軋轢の歴史的蓄積がそれぞれの国家社会に自然環境と同様の影響を与えるからである。

日本においてそのことを端的に捉えて文明上の違いを指摘したのが、梅棹忠夫<sup>\*31</sup> (1920 - 2010)の文明の生態史観である。下図のように人間が現実<sup>\*32</sup>に生きている最

大の大陸、ユーラシア大陸における人間社会の軋轢の強弱を、歴史的にまた気候地理学的に求め、乾燥地域

文明の見取り図(梅棹忠夫氏)



梅棹忠夫

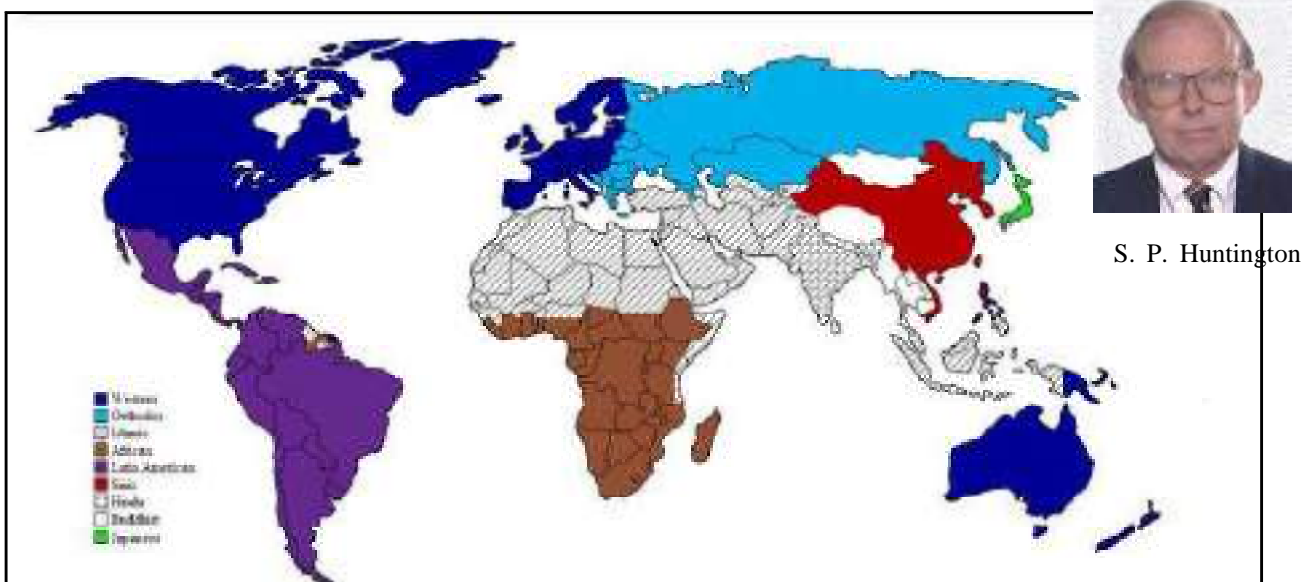
こそが破壊的の圧力を生み出す地域として、これからの距離によって、文明の成立基盤の違いを分析したものが、文明の生態史観である。

今泉もいうように「人間の認識思考は、悉く二霊三魂の所産であるから、必然的に時間、空間、因果律等の制約を受ける」(『全集三』 p 410) 以上、人間の世界認識思考も自然環境の影響を受けてそれに応じた変化をするのであり、その認識思考に応じた多様な国家社会を生み出すことになる。従って、副生界における人間の国家社

\*31 写真 <http://fuji-san.txt-nifty.com/osusume/2010/07/post-1ffd.html>

\*32 <http://blog.goo.ne.jp/6847/e/3220cac079d07efb0d0b573a29466b0d> より

会の多様性は、一種の自然的必然の成立として見るべきであり、何も他の国々の中心が人工的なものをもって、それを自然的なものではないと言われるものではないのである。仮に真の宇宙的真理に立脚したのが日本の国柄だとしても、他国もそれぞれにおかれた歴史的地理的環境に従って、自らの形を形成してきたのであり、それぞれの文明的価値は等価であるという立場こそが、神道的にも修理固成によって多様化した悦ばしき結果として、我々は受け入れるべきなのであろうと考える。例えば、下図は「文明の衝突」で知られるサミュエル・ハンチントン（**Samuel Phillips** <sup>\*33</sup> **Huntington**, 1927 - 2008）による八大文明図であるが、この八大文明は等価値である<sup>\*34</sup>と考えるのが、日本古来の神道の思想から言えば正しいのである。



以上をまとめれば、我々は量子力学的段階(エネルギー界)では、万物が同根一体につながっている存在であり、そこに遡れば我々是一体的な存在なのである。ただし、現実に多様性に満ちたこの世界においては、自然的に成り立ったこの多様性こそが尊重されるべきであり、それぞれが自主独立的な立場で自己の在り方を規定することが肯定されてしかるべきなのである。

\*33 写真 <http://www.pwhce.org/huntington.html>

\*34 <http://blogs.yahoo.co.jp/raindoropblue/16143754.html> より

この同根的一体性を確認しつつ、歴史的地理的環境によって生じた多様性を尊重する道こそが、我々の道であり、神道本来の道なのではないだろうか。人間同士でありながら、根本から違った存在と考えると相手を奴隷状態におくようなことは、それが歴史的に生じたものであっても、同根的一体性に反するものとしてこれは否定されなければならない。

一方で、現実世界における多様性を否定し、一律化していくような考え方、例えば歴史的法則性というドグマの下に共産主義革命によって世界を埋め尽くそうとした考え方は、逆に科学的法則性を主張するあまり、あらゆる多様性を圧殺する道につながりかねず危険なものであった。今でもグローバリズムの名のもとに、世界各地のローカルな多様性を否定する動きや、さらには中国において現実に行われている56民族を全て中華民族の名の下に民族の多様性を否定し、チベット・ウイグル等において民族浄化を行っていることなどは、民族的多様性を否定するものとして、世界においては断固拒否されるべき行為と言わなければならない。特に神道思想下にある日本国民は、哲学的にもこのような蛮行を否定すべきであろう。

## 2. 日本思想が追い込まれた時代に生きた今泉

この視点から考えて、なぜ今泉は日本の国柄の尊貴性をことさらに強調したのだろうか。その解答は、下記の言葉にあるように思われる。

<p>天皇の御本質は全国家、全国民生成化育の御本源にましますことである。天皇の大御心は宇宙万有を生成化育する産霊の大精神である。明治天皇が、「天下億兆、一人も其処を得ざる時は、皆朕が罪なれば、」云々と仰せられたのは、此の大精神の御発露に外ならぬのである。産霊の絶対理法を知らずして、日本国体を解することは出来ない。産霊の大精神を知らずして、天皇の大御心を察し奉ることは出来ない。外国思想の外に多くを知らない今日の学者、思想家等が日本国体を論じ、天皇の御本質を論じて、概ね誤解に陥り、謬論に墮するのは、深玄絶対なる産霊の原理を解しないからである。産霊の根本原理を解せずして、日本国体を論ずるのは、恰も数理を知らずして天文を論ずるが如く、生理解剖を知らずして医学を説くが如く、危険甚だしきものである。(『全集三』 p416-7)</p>
--



今泉が思想的に活躍した時代は大正時代から昭和19年までの約30年間であり、その間に日本の学問状況は明治時代の国家主義的まとまりを失い、天皇制打倒を必然とするマルクス主義が非常な勢いを以て日本に流入した時代であった。実際には、明治初期の皇学所・漢学所の廃止以降、正式の学問体系の中では日本の国学・皇学といった流れは傍流に扱われるようになった。そして明治政府の西欧化政策の中で多くの帝国大学系の学者たち、そしてそこを巣立ったエリートたちも西洋重視・自国及び東洋軽視の影響をもろに受けて、天皇や日本の古来からの価値を非科学的にして不合理なものとして否定する心性をすでに強く持つものとなっていた。大正以降の流れは、それをさらに急激に加速化するものとなっていたのであった。大正期は資本主義の発達の中で貧富の格差も放置される形で極端に大きくなり、社会的にも精神的絆(まとまり)も弱体化してきた状況となっており、日本全体のアイデンティティが国際主義的風潮のもとで揺らぎ精神的危機に陥っていたことから、自己の在り方を取り戻す運動が昭和初期から展開されるようになった。

今泉にとって、日本の思想的中核であるはずの神道及び天皇が、当時の状況として危機に陥るのをただ見ていることはできなかった。そこから、思想闘争とも言える運動に参画することになったのである。今泉からすれば、自分が見つかった日本の思想の真髄は、いかなる外国思想にもまして高く深く、真理に従ったものであった。そしてそこで見つけた日本の価値を知らずして、外国思想に染まり、いかにも自国の国柄を外国の思想で表現しようとするその思想的中途半端さ、あるいは精神的傲慢に憤懣やるかたないものを覚えていたに違いない。例えて言えばそれは人間の身体の医学を、獣医学の知識に基いて説明するのと同じくらい、似て非なるものをもって自己を規定するに似た行為だったのである。

こうした状況において、何よりも訴えるべきは、何故に日本の思想は自分たちが基づくに価する価値があるのか、それを強調し訴えることにあった。天皇や日本の価値を、ことさらに訴えたのは、そうした時代的状况によるものが大きかったように思う。

さらに、当時のもう一つの世界認識の傾向があったことを付け加えておきたい。そ

これは「世界国家」という視点である。

三魂の作用が正常に発展して、宇宙の真理を如実に人生社会に顕現するものが、日本国である。故に日本国は絶対の存在であつて、その発展は無限である。家族が発展して部落となり、部落が発展して国家となつたやうに、此の集团的発展は必ず世界人類を一丸とする大集団にまで発展する。これ三魂発展法の当然の要求である。而して来るべき世界国家は、たゞ天皇国としてのみ実現せらるべきことは、多くの説明を要せずして明かであらう。(『全集三』 p416-7)

当時は国際連盟等の影響もあつてか、はたまたソ連による世界革命の影響もあつてか、地球上の国家が一つにまとまるという世界国家という視点が色濃くあつた時代であつた。だから今の視点では分からぬくらいに当時における世界国家登場の見通しは、どちらかと言えば強くあつたのだと思われる。そうした中であつて、世界国家の中核として天皇国の価値を称揚することは、未来につながるものとしても重要視されたように考えられるのである。今の時代でもそれを考える人々がいるかもしれないが、逆に国家は数が増える方向であつて、EUも含め一つに収斂するということは必ずしも進んでいない。これは我々人類の有する本質的なあり方が、国家においても多国家共存という、多様性にこそあるからなのだとと言えるのではないか。

## 第 1 1 章 今泉の思想の批判的継承について

### 1. 神道思想から生まれる共生哲学

今泉のいう西洋等の「存在の思想」とは、出発点から互いが個々違つており、同じ根本を持たずにいるがゆえに、法や道徳、そして権力など種々の人工的なまとまりの基盤を仮定し、それに立脚するがゆえにまとまりが脆く常に闘争を生む思想という意味であつた。例えばそこから生まれる個人主義や自由主義は、各人の理性を信頼して個人的志向性を追求することを是とし、また社会における自由な行動の展開の在り方を肯定するものであつた。

だが、前にも述べたとおり、これらの考え方を生み出すもとはそれぞれの社会背景があり歴史背景があつたのであり、その背景自体が地理的また歴史的状況として、人々が意図的に選んだわけではない与えられた環境という中で生まれたもので

ある。従ってそれは、人間における自然環境と同じであり、他の動植物が生み出されたのと同じくらい、環境適応による多様性の肯定という視点で見るべきものである。

我々はそうして生み出された人類のいくつかの文明の型を対等に認める中でこそ、互いの価値を尊重しあい、その上で相互の違いを超えて普遍的な価値を追求することのできる協力関係を生み出すという、段階を踏まえた対応が求められているのではないだろうか。そしてそこで重要なのは、相互の違いを尊重することと共に、自分たちは根を同じくする対等普遍に開かれた存在なのだということを捉えようとする哲学なのだと思われる。

今泉(そしてラズロも)が見出した量子力学的レベルでの人間は、全てが根を同じくする同根一体の存在だと言える。それは普遍的に平等で一体的であり、相互の違いを超えて基づくべき真実である。それも、単純に物質的に同じであるという意味ではない。量子力学レベルではあらゆるものが精神や生命を有しているということもできるのであり、我々はあらゆるものが生命的に同根一体の存在、またはあらゆるものが精神的に同根一体の存在であるという認識が、これまでの機械的物理認識とは全く異なるのである。この視点から我々すべてが生命的存在であり精神的存在であり、それも同根一体のものなのだという認識こそが、最新の科学から見て正しき真に我々人類に共有されるべき世界認識なのである。

そしてその一方で、副生界における人間は、個々の具体的な違いを歴史的環境的に有しており、その違いは自然的なものとして肯定されるべきものである。そして人間はこの共通性の認識と多様性の認識の上に、初めて妥当な範囲の選択が生まれてくるのである。

例えば先に述べた個人主義や自由主義の問題点は、それが他者を無視した行動につながり、またときに他者を傷つけても自己の追求を優先する、そうしたバラバラな利己的行動を生み出すところに問題があったように思う。そうであるならば、我々人間が相互に同根的存在であり、他者を傷つけることが同根性に反するものとして否

定されるならば、その個人主義も自由主義も、同根性と多様性の双方のバランスをとるものとして位置づけられたときに、本来の妥当な行動を生み出す主義となれるのではないか。この神道思想から見た共生哲学こそ、今後の人類にとっては重要な共生基盤になる可能性があると思われる。

## 2. エネルギー界に基づく思想と副生界に基づく思想

このように見てくると、我々は哲学には世界の三層(エネルギー界、原生界、副生界)のどこに焦点を置いているかで、その世界観や見る方向が異なってくるのが分かる。例えば、日本神道はエネルギー界への洞察に基盤をおき、そこから副生界に向けて修理固成の論理で世界の多様性を見る哲学だと言える。これに対して、副生界に基盤を置き、総てに対して個別性と差別性を認め、その個々の成り立ちについて分析的に理解を深めていく哲学が、西洋の哲学なのではないかと思われる。デカルトらによる科学の成立などは、その哲学傾向の典型的な申し子であり、その世界観はニュートン物理学が描く、機械的宇宙観にこそ端的に見出すことができる。

一方で古代の東洋思想は、総じてエネルギー界という最基底の層を捉えたものが多く、日本神道だけでなく、古代インド思想や古代中国の老荘思想などは、これに該当する。ラズロは特に古代インドの思想に深く共通性を認めており、次のような文を書いている。

■この最も新しい世界観は、最も古い洞察を確認しなおしているようにも思える。空間が物質を創造する源であるという神秘的な観念はほぼ真実を言い当てている。東洋では、この観念の起源は五〇〇〇年以上も昔にさかのぼることができる。古代インドの賢者(予言者)によれば、空間は唯一の実在である物体が冒険を繰り広げる単なる舞台なのではない。それ自体が卓越した実在であり、空気、火、水、土の四元素とまったく同じように実在して知覚できる微妙なものなのである。この考えは、現代の一部のインド人哲学者たちの思考にも反映されている。

『創造するコスモス』p259

■結びつきと相関をもたらす何ものかが宇宙に存在するという考え方は、何も新しい発見ではない。それはいにしへの知の「再」発見にほかならず、直観的な洞察として、偉大な宇宙観のすべてに見られるものである。その最も顕著な例はヒンドゥー教の宇宙観だろう。ヒンドゥー教の宇宙観では、結びつきと相関の原因となるものは、アーカーシャ(虚空)と呼ばれており、宇宙の五元素のなかで最も基本的なものである。 『生ける宇宙』 p37

このように古代インドも含め、東洋系には最基底層に基づくと考えられる世界観があり、その成り立ちは直観的認識から生まれるのに対して、西洋の副生界に基づく世界観な思弁的認識である。西洋の科学は、この思弁的思考の中から、理論的積み上げを重ねる中から、量子力学や現代の最先端の科学によって、初めてエネルギー界の層に辿り着いた観がある。つまり、東洋と西洋では出発する世界の層が異なりながら、最終的には同じ共通の世界観を持つに至りつつあるのだと言える。

実際に科学技術によって、西洋諸国が列強として世界を征服したこの500年の西洋文明中心の時代が今日終わる中で、西洋の世界観もニュートンの機械的で物質的な世界観が崩れ、それに代わって量子力学などの現代の科学によって生命的な世界観を見出されつつある。これはすでに東洋の諸哲学が見出していた生命的な世界観が、今後の時代において重要であることが、科学的にも証明される時代が来たのだ、ということもできる。今泉が主張してきたことは、この流れにあるのだと言って良い。

ただ、西洋の副生界に基づく哲学が産み出した偉大な科学的知見は、東洋の知見では決して見つけられなかった人類の共有財産である。東洋と西洋は、その出発点は異なっているけれども、相互補完的なのである。その視点で捉えることこそ、我々が修理固成の論理で見えてくる「それぞれに処を得た」世界の見方であり、共一進化を形作る世界観なのだと思う。

## 2. 世界皇化の真意：根本と多様性の両方に基づく共生的哲学の時代へ

つまり、これまでの哲学的主張は、常に「個人」であれ「自由」であれ、論理的に探求される中で見出されたそれぞれ一点の価値の頂点だけを追求することをもって肯定してきたように思う。しかし、実際には「根本と多様性」のように、人間の深層・表層両方の在り方に立脚した2つの価値の間にこそ、本来的に人間が目指す妥当性があるように思われる。だから、これまで多様性の価値追求だけしか視野になかった個人主義や自由主義に対しては、自分たちが同根一体であることを重視する価値を

含むという意味の「根・個人主義」であり、「根・自由主義」となるならば、本来見失ってはならない価値の範囲が明確になるという意味で進化したものとなる。人類に必要なのは、量子力学的意味での一体性を第一に目指すことではない。それはかつての共産主義革命のように、一種の全体主義に陥ってしまうだけである。本当に重要なのは、自分たちの多様性を尊重し自分の形をもちつつ、見失われてきた同根一体性の価値を導入することで、共に進化することなのである。

思うに、神道から平泉が見出した「発顕と還元」の原理は、「発顕(多様性)」と「還元(同根性)」という具体的なイメージを持たせることで、その意味を再評価できると思う。世界国家思想の影響なのか、今泉はこの意味では「還元(根本)」のことに主軸をおき、「発顕(多様性)」の意味を見損なっていた感がある。従って、「発顕(多様性)」ばかりで混乱した世界(特に日本国内思想)において、もう一度同根一体性を取り戻し、健全な国家国民になっていこうとしたという点では大いに評価できるが、他の多様な文明国家も天皇の下にという統合ということは、たとえ武力等によらずとも肯定することはできない。

大事なものは、日本の神道が見出した「発顕(多様性)」と「還元(同根性)」の原理が、他の多様な世界において共に進化することをもたらすことである。いかなる哲学がどのような範囲で認められまたは制限されるべきか、その判断基準たる哲学を示すことに、神道に基づいた日本思想の役割があるのではないか。そうした意味では、今泉の思想は今日でも継承すべき高い価値があるのだと私は思う。

因みに日本発の2つの価値を同時に肯定し、その両方をみて自分のあるべき方向を探求する姿勢は、和辻哲郎の「間柄的存在」の思想にも通ずるものがある。神道的にはそれが「霊(ひ)」のレベルでの同根性と副生界の多様性、その双方への肯定の論理となる。実際に人間は世代を遡れば、先祖は歴大な数に及び、その先祖の数を考えただけでも自分たちの同根性は明らかなのである。神道の祖先祭祀は、このような事実に基づいた祖先への感謝と交流の体系なのである。このように従来 of 同時代

的なものだけではなく、歴史的経過のなかにもある根本的一体性を加味することで、日本を超えて世界にも普遍的に当てはめられる根拠が生まれるのではないだろうか。

今泉の絶筆となった「世界皇化」とは、単純に天皇の影響力を世界に広めるという意味ではない。それは哲学的な意味で、副生界に基づく西洋哲学限界を超えて、エネルギー界の層で捉えた思想である生成の思想、または東洋に普遍的に広がっていた生命的な世界観を、世界の基本認識としていくということなのである。そしてそれが東洋哲学の見出してきた知見と西洋の見出してきた知見を調和を見出し、今後の人類の文明がそれぞれの型を持ちつつ共一進化する道に繋がるものとなるのだ。

### 3. 「世界皇化」は「神道」の「古道(自然道)」化で可能となる

共一進化する道に進むために必要な、生命的な世界観の世界的普遍化はどのようにして達成できるだろうか。ここで美術史家であり、日本の宗教にも造詣の深い田中英道氏(東北大学名誉教授)によれば、神道には「自然信仰」「祖先(御霊)信仰」「皇祖霊信仰」の3要素があるという<sup>\*35</sup>。この中でも特に古い縄文時代から続く、日本の皇室成立以前から成立している要素は、①自然信仰と②祖先信仰の2つである。いわゆるアニミズムの世界が自然信仰であれば、その中に祖先の御霊信仰も含まれ、死んで人々とのつながりが終わるのではなく、死者の魂との交流が続くというのは、三内丸山遺跡の道沿いの墓地の立地や、同じアニミズムに生きたアメリカインディアン達の信仰とも共通している。この2点は他のアニミズム世界とも共通しており、かつて一神教成立以前には世界中で普遍的にこの2つは信仰されたものであった。

今日エコロジー思想が普及し、地球環境に対する配慮は世界共通の思想となっている。自然を破壊することに対する罪の意識、そしてその地球環境全体の広大なつながりの上に成り立つ自然への感謝の意識は、人類に広く共有されるようになってき

---

\*35 「やまと・ごころ」という宗教 | 田中英道HP [http://hidemichitanaka.net/?page\\_id=364](http://hidemichitanaka.net/?page_id=364)

た。このような事態においては、「自然信仰」は宗教の差を超えて共感を得られる時代になってきていると思われる。それは、かつて人類が共有していたアニミズムへの回帰であり、より調和的な世界認識を持ちうる基盤となるものと思われる。

今泉の國體論が日本こそが本物の国家的性質を備えた国とみなす根拠は、田中氏が整理した3要素の中の特に皇祖霊信仰(皇室への信仰)にある。ある意味、宇宙の成り立ちの本質通りの天皇という存在は、もし今泉の言う通り八大文明全体の中心ということであれば、中心は一つだけであるが故に、天皇という存在が他の文明で存在しないのは、ごく自然の理に従ったものだとも言える。そう考えれば、それは優劣で見るべきものではなく、役割分担として、今泉が言うところの天皇も存在するのである。従って、神道の世界化において皇祖霊信仰の海外普及は、そもそも神道的に言って求められてはおらず、現実にも相応しいものではない。

これに対して全ての文明世界に共通し得るのは、「自然信仰」という共通項であり、各々の祖霊への信仰は生じる場所と生じ得ない場所が生まれる二次的で個別的な部分と言えるだろう。

そうした意味で、我が国の「神道」の呼び名がそのままの形ではなく、かつて神道の別の呼び名であった「古道」の方が「いにしえからの道＝自然への信仰」という形が生まれる。今泉の見出した生成の思想を主軸を世界中に普及するならば、この「古道」の形ならば十分可能性があるし、すでにその普及は今日進んでいるとも言える。象徴的には「伊勢サミット」における各国首脳が伊勢神宮を参拝して感動を口にされたが、特にドイツ・メルケル首相の「**ここ伊勢神宮に象徴される日本国民の豊かな自然との密接な結びつきに深い敬意を表します。ドイツと日本が手を取り合い、地球上の自然の生存基盤の保全に貢献していくことを願います。**」は、自然を基盤とした人類共通の世界観の形成の可能性を示していると言えよう。また、世界の駐日大使の代表を務められているサンマリノのマンリオ・カデロ駐日大使が、自身がカトリック教徒でありながら深く神道を理解され、サンマリノに東日本大震災に対するメモリアル神社を建てられた行為とその理解にも、神道が「古道」として世界に普及する可能性が見出せるのであ



る。もし仮に皇祖霊信仰の部分まで広がるとすれば、十分に世界に「古道」が広がり、我が国のように「和」を尊ぶような社会環境が成立した場合ではないだろうか。いずれにせよ、皇祖霊信仰は率先して広げるべきものでもなく、また広がるものでもないだろう。しかし、真に善きものはいつか必ず「自ずと」広がる時がくる。

以上、今泉の思想を、世界へは「古道」とする形ならば、アーヴィン・ラズロ達が目指すような解決の道を、日本の思想にもとづいて提案していくことが我々にも可能になると思われる。その道が世界に今まで以上の調和をもたらす可能性が必ずあると、私は信ずる。

## 第12章 最後に

宇宙万有は悉く天御中主神より出づるものであるから皆神である。世界のあらゆる人類邦土生産は、悉く天御中主神の分霊、分魂、分体神である。此の意味に於いて祖神は山の神を生み、川の神を生み、海の神を生み、植物の神を生み、動物の神を生み、風雨雷電、雲烟気流の神を生み、世界人類悉く神として生れ出でたのである。人間の生活の上より之を区別して、鉱物と云ひ、植物と云ひ、動物と云ひ、或は異邦人と云ひ、野蛮人と云ふことは、固より差支はないが、之を軽蔑したり、虐待したりすることは、民族信仰の許さない所である。天御中主神の御心より云へば、同工異曲であつて、各自相互に其の自性を發揮し、自我を顕しつつあるのである。相互に相寄り相集りて、各自の生活をなすと共に、各自相互に調和統一して、相互に各自の生活を扶助しつつあるのである。我に主観あり、自性を認め、自我を認むるが如く、彼等も亦それ相応の主観あり、相互に自性を認め、自我を顕しつつあるのである。彼等はそれ相応なる思ひやりをなして、彼等の労を慰藉せねばならぬ。相対的同情の念を互に払ふのは、独り人間と人間との交際のみではない。動物、植物、鉱物、天地万有に対しても、相愛の念を發すると同時に、其の労を謝する所なくてはならない筈である。吾と我が身の自性に省みよ。斯くしてこそ、其の自性の満足するものではないか。表面こそ千様万態であるが、其の裏面は同根一体であつて、等しくこれ神である。人生生活は独り人間のみの生活として已むべきものでない。動物生活、植物生活、鉱物生活、天地万有の生活と調和統一して、始めて人生生活を全うし得るのである。なほ進んでは此等の根本たる産霊神としての生活状態に達せんとするのが、我が祖神の垂示せられた皇道精神である。(『全集三』 p415-6)

今回読んだ範囲の中で、一番今泉の言葉として印象的な部分である。我が国の神

道思想の気高さと開かれた心をよく感じさせる文章である。あらゆるものに同根意識を持つ、あらゆる自然の中に神をまた精神を見る姿勢、そして自己の存在を世界の調和の中におこうとする姿勢、いずれも現代の高度文明世界において必要とされている意識であり自覚なのではないだろうか。

先に我々は世界の八大文明を見た。その意義を改めて確認すれば、文明とは人間に精神的な安定性をもたらすアイデンティティの帰属基盤であり、自らの文明がいかなる特徴を備えるのかを考察することが、深い自己認識につながるからである。そして宗教への考察こそがその具体的内容となるのである。今回の探求からは、意外にも我が国の神道思想は、この20年ほどになってやっと見えてきた科学の成果と合致(近似)する点があり、神道が見出していた自然への深い理解と普遍的な道理を再確認できたように思う。

動植物の世界にはそれぞれ特徴的な形態があるように、人間の高度化した文化たる文明には、少なくとも8つの型がある。そして型の上に、国家社会から個人の生き方まで一貫した安定した基盤を築くことが、最も自然な無理のないやり方である。ラズロは次のように指摘する。

私たちが行うすべてのことは、一貫性を、そしてそれゆえ、私たちの環境の進化と発展を、促進するか、妨害するかのいずれかである。(中略)自分の内部や周囲で一貫性を生み出したり一貫性に貢献したりすることは、抽象的な理想ではない。生きている自然は一貫性を持っており、宇宙も一貫性を持っている。生物圏の中にも、そして、宇宙全体の中にも、連続的・意図的に一貫性を損なうものは存在しない。『生ける宇宙』p97, 99

ラズロはこれに続けて、この2, 3百年間の人類が、一貫性を崩す暴力的な革命に覆われ、主な哲学や思想もこの一貫性を破壊することを正当化することにエネルギーを注入するものとなってしまったと指摘する。特に近代以降の人類が伝統的な自らの型を破壊して、科学技術を信奉し、理性主義的な合理性の高い国家社会を形成しようとした結果、世界には不必要な攻撃、暴力そして不合理な分断化と対立を生み出してしまったのであった。

しかし、沢山のこうした反省材料となる経験を積んだ我々は、もうそうした一貫性の

破壊が何か優れたものを生むという思い込みから離れるべき時代に至ったと言える。お互いが自分の型を守りながら、そして神道が示し得る「古道＝自然への信仰」へ進むことこそが、本来の一貫性を持った健全な共一進化への道となるのである。

思えば、今泉の思想闘争は、そうした日本だからこそ有してきた古代人類に繋がる一貫性の根幹思想を守るための闘争だったのである。それは破壊を目指す人々にとっては当然目障りなものでしかなかったが、日本本来のあり方からすれば実に正しい道(型)を守るための闘いであった。そうした先人の精神を継承し、我が国そして世界を健やかな進化に導く思想の形成こそ、現代に生きる我々の使命なのではないだろうか。今回の小論もその流れの中にあれば幸いである。



## ■参考資料

- 『今泉定助先生研究全集』全三巻  
『創造する真空(コスモス)』アーヴィン・ラズロ  
日本教文社 平成11年  
『叡智の海・宇宙』 同 同 平成17年  
『生ける宇宙』 同 同 平成20年  
『物質のすべては光』フランク・ウィルスチェック  
早川書房 2009年  
『川面凡児全集 全10巻』昭和45年  
『日本人の世界観』大嶋仁中公叢書2010年  
『宇宙はわれわれの宇宙ではなかった』佐藤勝彦 PHP研究所2008年  
『鎮魂行法論』津城寛文 春秋社 平成2年  
『国家神道とは何だったのか』葦津珍彦神社  
新報社 昭和62年  
『天皇の秘教』藤巻一保 学研 平成21年  
『神道の呼吸法』中川正光 六然社 平成18年  
『神道の理論』中西旭 たちばな出版平成7年  
『世界の終末』ルネ・ゲノン平河出版社1986年  
『世界の王』 同 同 1987年  
『秘儀伝授—エゾテリズムの世界』リュック・ブ  
ノワ 文庫クセジュ 1976年  
『日本思想という病』植村和秀 他 光文社  
2010年  
『文明の生態史観』梅棹忠夫 中央公論社  
1998年  
『日本主義と東京大学』井上義和  
柏書房 2008年  
『国学者論集』藤田徳太郎 小学館昭和17年  
『日本の名著24 平田篤胤』中央公論社 1  
997年  
『よみがえるカリスマ 平田篤胤』荒俣宏、米  
田勝安 論創社 2000年  
『明治維新と平田国学』国立歴史民俗博物館  
平成16年  
『国立歴史民俗博物館研究報告第122集  
平賀国学の再検討(一)』 2005年  
『別冊太陽 平田篤胤』平凡社 2004年  
『柳田国男全集<13>』ちくま文庫 1990年  
『先哲を仰ぐ』平泉澄 錦正社 1998年  
『文明の衝突と21世紀の日本』サミュエル・ハンフット  
集英社新書 2000年  
『神道の逆襲』菅野覚明 講談社現代新書  
2001年  
『現人神の創作者たち』山本七平 文藝春秋  
1983年  
『歴史に観る日本の行く末』小室直樹 青春  
出版社 1999年  
『平田篤胤の神界フィールドワーク』鎌田東  
二 作品社 2002年  
『神道のスピリチュアリティ』鎌田東二 作品  
社 2004年  
『世界がわかる宗教社会学入門』橋爪大三  
郎 筑摩書房 2001年  
『新しい日本史観の確立』田中英道 文芸  
館 平成18年  
『玉くしげ 秘本玉くしげ』本居宣長 岩波  
文庫 2004年  
『日本的靈性』鈴木大拙岩波文庫2005年  
『概説 日本思想史』佐藤弘夫 編 ミネル  
ヴァ書房 2005年  
『神道が世界を救う』マンリオ・カデロ 加瀬英  
明 勉誠出版 2018年  
参照HP  
今泉定助研究会 <http://w01.tp1.jp/~a251757002/>  
文科系のための量子力学的世界像(エヴェレッ  
ト解釈からの帰結) <http://homepage2.nifty.com/qm/tutorial.html>  
優しい物理教室<http://kids.kek.jp/class/particle/index.html>  
量子論と複雑系のパラダイム Frank Wilczek  
<http://kamakura.ryoma.co.jp/~aoki/paradigm/paradigm-web.htm>  
粒子を見るか波動を見るか  
<http://homepage2.nifty.com/einstein/contents/relativity/contents/relativity314.html>  
the Club of Budapest International Foundation<http://www.clubofbudapest.org/index.php>

# 神明社拝殿奉掲額

一品 有栖川宮 熈仁親王 皇典講究所総裁

今泉 定助 神宮奉斎会会長

塩野 季彦 司法大臣・通信大臣

鳩山 一郎 内閣総理大臣・政友会総裁

公爵 近衛 文麿 内閣総理大臣・枢密院議長

男爵 平沼騏一郎 内閣総理大臣・枢密院議長・

法学博士久原房之助 通信大臣・政友会総裁

俵 孫一 商工大臣・民政党顧問

寛 克彦 東大名譽教授・法学博士

水野鍊太郎 内務文部大臣・法学博士

有田 八郎 外務大臣

山岡萬之助 関東長官・法学博士

島田 俊雄 商工大臣・農林大臣

公爵 一条 実孝 貴族院議員

広田 弘毅 内閣総理大臣・外務大臣

吉田 茂 厚生大臣・貴族院議員

千葉 胤明 宮内省御歌所寄人

山崎達之輔 農林大臣・通信大臣

藤沢幾之輔 商工大臣・枢密院顧問官

頭山 満 大日本生産党顧問

男爵 本庄 繁 陸軍大将 侍従武官長

宇垣 一成 陸軍大将 外務拓務大臣

小磯 国昭 陸軍大将 内閣総理大臣

松井 石根 陸軍大将・上海方面派遣陸

軍部隊最高指揮官

真崎甚三郎 陸軍大将 教育總監

林 銑十郎 陸軍大将 内閣総理大臣

畑 俊六 陸軍大将 侍従武官長・中

支派遣軍最高指揮官

菱刈 隆 陸軍大将

男爵 大角 岑生 海軍大将 海軍大臣

山本 英輔 海軍大将 聯合艦隊司令長官

有馬 良橘 海軍大将 教育本部長

末次 信正 海軍大将 内務大臣

子爵 小笠原長生 海軍中将 宮中顧問官

米内 光政 海軍大将 内閣総理大臣

男爵 安保 清種 海軍大将 海軍大臣

男爵 鈴木貫太郎 海軍大将 内閣総理大臣

竹下 勇 海軍大将 聯合艦隊司令長官

中村 良三 海軍大将 艦政本部長

藤田 尚徳 海軍大将 侍従長

野間口兼雄 海軍大将 教育本部長

岡田 啓介 海軍大将 内閣総理大臣

豊田 副武 海軍大将 聯合艦隊司令長官

豊田貞次郎 海軍大将 商工大臣

百武 源吾 海軍大将 侍従武官長

小林 躋造 海軍大将

塩沢 幸一 海軍大将 南支方面海軍最

高指揮官

吉見 勇助 海軍大佐 瑞興丸艦長

作成 白石神明社社務所